



幼稚園児の長女桃子ちゃんを膝に抱いてインタビューに答える立松和平。(1983年頃)



インタビューに答える在りし日の立松和平。



句会の仲間たちと。(1998年頃)



知床・知布泊村の仲間たち



息子の心平さんと。



高橋判明・恵子夫妻と。



知床・毘沙門堂5周年記念祭。(1999年)



沖縄で開かれた『大城立裕全集』刊行記念パーティーにて。(2000年)



日光湯の湖荘を訪れた立松夫妻。右端が女将。
(2008年秋)



『足尾に木を植える会』の会場で、文芸評論家の
黒古一夫氏と。(2000年)



塩之入峠・良寛歌碑と。(長岡市与板)2009年12月18日／撮影・齋藤達也

立松和平追想集 目次

写真 一

新聞記事 一〇

吊辞 北方謙三 八

追想文（五十音順） 一三

荒川じんぺい	一四
伊藤誠	一五
漆原智良	一七
大城立裕	一八
大沼信之	一九
大野玄妙	二一
大橋健浩	二三
岡田林太郎	二三
加藤宗哉	二四
神山英昭	二五
菊地秀一	二六
熊谷忠興	二八
黒神直也	二九
黒古一夫	三〇

見城美枝子	三二
小嵐九八郎	三三
小勝政一	三四
小島岳彦	三五
小檜山博	三七
齋藤達也	三八
坂上弘	三九
坂本忠雄	四〇
笹川悦導	四一
佐野博	四三
清水光雄	四四
菅原文太	四六
杉田亮毅	四六
鈴木貞美	四七

鈴木基司	四八
高井有一	五二
高橋敏夫	五四
高橋伴明	五五
高橋公	五六
高良勉	五八
田崎亨	五九
田代芳寛	六〇
田中知二	六一
田村雅之	六三
辻井喬	六四
津島佑子	六五
鶴田卓彦	六六
中井健人	六八
沼尾博行	六九
野田知佑	七〇
野村宗次郎	七一
林京子	七三

立松和平・略年譜	九六
父の愚直さ 林心平	九八
あとがき	一〇〇

彦由真希	七四
日野西光尊	七五
広河隆一	七七
福島泰樹	七八
藤井吉朗	八〇
藤田和芳	八一
前田速夫	八二
鷹赤兒	八三
三田誠広	八五
道浦母都子	八六
宮辺尚	八七
村瀬和正	八八
山口泉	八九
山田俊男	九〇
山田裕樹	九二
山本樹	九三
吉岡忍	九四

吊辞

北方謙三 作家

君はいま、どこを旅しているのだ。

和平さん、君の人生は、旅であった。世界じゅうを駆け回っていたが、小説を書くこともまた、長く果てない旅であった、とぼくは思っている。

小説の旅を、和平さんとぼくは、四十年にわたって並走してきたのではないだろうか。

思い出すのはやはり、二十代のころだ。会って飲んでいると、そのころの話が、必ずひとつやふたつ出たものだ。作家としては、惨めだった。惨めさを共有した唯一の友人が君だったと、改めて思う。惨めさの共有はまた、純粹さの、そして一途さの共有でもあった。没原稿の量を競い、この没原稿の山が俺たちの青春ではないか、と君が言ったことを思い出す。捨てたものではない青春だった、といまだから思える。四十年間書き続けてきた苦しさは、まさに言語に絶するものではあったが、あの惨めさを思い出すと、報われているという気にもなれたのだ。

俺もおまえも、際どいところをすり抜けて、いま作家やってるんだからよ、と君は飲むと口癖のように言った。あの、のんびりした口調の中にある、しみじみとした響きを思い出す。作家であれて、幸福だった。その思いをもまた、君は共有できる友であったのだ。

別れの言葉は、言わない。

君が残した、作品があるからだ。本を開けば、いつでも、それを書いていたころの君に出会え、語ることもできるからだ。ぼくにとつて君は、いつだって作品の中で生きている。

ただ、君はもう、新作を書くことがない。それが、ただ悲しい。

君が残した作品は、時代の中でどう読み継がれていくのだろうか。それを見届けるのが、君よりも長く生の側に立つめぐり合わせになった、ぼくの友人としての責任だろう。それだけは、果していいと思う。

そしてまた、和平、いつかどこかで飲もう。飽きずに、あの若かった日々のことを、語り合おう。

立松和平よ、さらば

[illegible]

も、時々の
で、曲の
演でも
千歳
曲は
しての
だ、
感中
がら
である
にあ
眼
9月
青春
の愛
ち、
持つ
世界

業苦を生きた旅 終わらない

[illegible]MOBILE
CITY
(1990)[illegible]

といふのである。この「新」の字は、明治の「新」の字と異なり、明治の「新」の字は、西洋の「新」の字に倣つたものであるが、この「新」の字は、日本の「新」の字に倣つたものである。この「新」の字は、日本の「新」の字に倣つたものである。この「新」の字は、日本の「新」の字に倣つたものである。

真摯に問い続けた「生」



網走管内海上で開かれた森林環境フォーラム

[illegible]

立松和平氏の急逝を悼む

卷一

2010年2月10日(水)北海道新聞

文化



若き日の立松和平さん

仏像の前に立つて、彼が頭を
垂れ、膝を合掌していた事が
あった。そして、長い祈りの
あとようやく歩き出した彼は
、ふと私を顧みて、仏教の
力は偉大で、と呟くように言
った。彼が何を考えていた
か、むろん解らないが、彼の、
にこりともしない生真面目な
表情は今も忘れられない。

生真面目な顔忘れられず

立松和平さんを悼む

高井 有一
作家

[illegible][illegible]

2010年2月11日(木)読売新聞

2010年2月13日(土)朝日新聞

イ」が、学生時
代からの愛称で

福島 泰樹



(実用三書・新編) 片上保男=文芸春秋社1990年

生き続ける万感の言葉

てゐる。留聲機と二重奏動
作の「音」を感動
の源に於ては、
の聲に響いて出る
の音の出口から出る人
間は、日本人の心を
惹くものである。一九
七三年、文芸春秋は「星
野の文」で星野の歌を
取り上げた。その歌は

つばの羽根は、手
紙の形に似て、
風をたたくが、星を
滑りて、空へ、星を
滑りて、空へ、私
は、歌、歌、歌、
一九六三年、文芸
春秋は、星野の歌を
取り上げた。その歌は

星野の歌は、手
紙の形に似て、
風をたたくが、星を
滑りて、空へ、星を
滑りて、空へ、私
は、歌、歌、歌、
一九六三年、文芸
春秋は、星野の歌を
取り上げた。その歌は

星野の歌は、手
紙の形に似て、
風をたたくが、星を
滑りて、空へ、星を
滑りて、空へ、私
は、歌、歌、歌、
一九六三年、文芸
春秋は、星野の歌を
取り上げた。その歌は

●作家の立松和平さんは8月、多額の借金のため東京で自決した。

業、松岡元彦ならにも精力的に働きかけた。十年ばかりの月日全かけた『源氏物語』は三千百枚に及ぶ大作その後、再び林右衛門も自ら肉質、塩原正計の連載を開始した。

この正月、京都と横浜の間を鉄道を、松岡の御にいつもお供が付き添ってくれた。数日後、特設出版から刊行が始まった「京松和平安本」(西巻の種々)の題型を受け、電装した。元氣な

生の現場」に立松文学の真髄

[illegible]

作家 立松和平氏—— 黑吉一夫(文藝評論家)



立船勘平氏—平成21年6月、
東京都内で（大塚俊夫撮影）

[illegible]

2010年2月15日(月)産経新聞



立松和卓

書くことは生きるということ

『説』第33巻(題詞出版)刊行開始を機に

四十年間一貫した方法意識
一人一人の人間の命に向き合って書く

1. 本報社址：台北市中正區重慶南路一段126號11樓（原中興大樓）
 2. 本報電話：(02) 2386-2386
 3. 本報傳真：(02) 2386-2386
 4. 本報廣告部：(02) 2386-2386
 5. 本報發行部：(02) 2386-2386
 6. 本報訂閱部：(02) 2386-2386
 7. 本報零售部：(02) 2386-2386
 8. 本報印刷部：(02) 2386-2386
 9. 本報攝影部：(02) 2386-2386
 10. 本報編輯部：(02) 2386-2386
 11. 本報採訪部：(02) 2386-2386
 12. 本報設計部：(02) 2386-2386
 13. 本報美編部：(02) 2386-2386
 14. 本報校對部：(02) 2386-2386
 15. 本報總務部：(02) 2386-2386
 16. 本報會計部：(02) 2386-2386
 17. 本報法律部：(02) 2386-2386
 18. 本報資訊部：(02) 2386-2386
 19. 本報培訓部：(02) 2386-2386
 20. 本報工會：(02) 2386-2386

2010年2月19日(金)週間読書人

追想文

（五十音順）



ワッペイさんとの出逢い

荒川じんぺい 装幀家・エッセイスト

立松和平さん訃報を聞き、共通の友人や編集者たちに電話をしても状況は判らなかつた。果然と帰宅し、ひとり供養の酒を飲んだ。一九七五年、文芸誌すばる編集部で出会った想い出が去来した。以来友と慕い、「ワッペイ」「じんぺい」と呼び合う仲であつた。当時の出逢いを紹介し、彼を偲びたい。亡き石和鷹さんが、本名の水城颯で編集長の時代だつた。「おい、じんぺい。同郷の男が来てんだぞ、こつちへこいや」と、わが栃木弁を真似た声が響いた。頭を上げると水城さんの地黒の顔のニヤツと笑つた目線と合つた。彼は、応接室の方向を顎でしゃくつた。応接室には、白い木綿のインド風のシャツに無精髭を生やした四角な顔の男が、ゲラ刷りの校正をしていた。「ワッペイさん。野州の男を紹介すんべ」と、声色の水城さん。立ち上がった彼は、顔面一杯に笑みを浮かべていた。「立松です。栃木はどこだつべ?」「壬生です……」同郷人というだけで身内に会つたような気分になり、饒舌になつていた。「東京から栃木を見つと、遠近法みたく、同郷人はみんな親戚兄弟のように思えんべ」と笑つた。

ときどき上京する彼を、飲みに誘つた。そして、装幀家になりたいと夢を話した。僕の夢は『光り匂い満ちてよ』で、実現してくれた。以来、装幀家になり頭が上がりなかつた。

「タンポポのような種が飛んでいつて、そこに落ち、深く根を張っているように思いうけられます。どうか大きな花を咲かせてください。」「八ヶ岳に移住した僕に、平成一九年にくれた葉書だ。電話でも、優しく励ましてくれた。そして身体を気遣ってくれた。それなのに先に逝くなんて……」

柩に眠るワッペイさんは、穏やかなお顔だった。題目を唱えながら、霊柩車に運ぶ柩は重かった。涙を降り払おうと頭を上げると、小雨降る空に寒桜が満開だった。毎年同郷人たちと、ワッペイさんを囲んで東京九段での花見が恒例だったのを思い出した。今頃、石和鷹さんと栃木弁で小説の話をしているのでしょうか。さようなら、ワッペイさん。

○

立松さんとの想い出

伊藤誠

奥日光の番人

立松さんとの出会いは、ニュースステーション心と感動の旅でした。一九八八年、昭和から平成に変わった年でした。

敏腕ディレクターの小早川さんが、奥日光を立松さんに紹介させるから協力しろという感じで奥日光に入ってきました。

この番組はこの土地でも来て欲しいと言われるとの事でした。私にとっては素晴らしい所に土足で入られるような気がして、三分や五分で奥日光は紹介出来ないと断りました。

立松さんは困ってしまい「誠さん、とりあえず奥日光を案内して欲しい」と言うことで、私は奥日光に何度も足を運んでいる立松さんを千手ヶ浜に案内しました。

立松さんは巨木の林や、鹿、オジロワシ等の動物を見て「奥日光の自然は知床の自然より凄い」と奥日光の虜になったようでした。



立松さんの熱意に負け、心と感動の旅が奥日光の冬からスタートし、そして春、夏、秋と奥日光を紹介していただきました。

特に秋は千手ヶ浜から夜にもかかわらず生中継を行い、立松さんは高視聴率だったと喜んでいました。私は心と感動の旅という番組で奥日光を全国に紹介していただき、今でも立松さん、小早川さんには感謝しています。

立松さんは二〇〇九年、奥日光を舞台に「二荒」を出版され好評でしたが、ちょっとした問題で絶版となったとき立松さんは、争えば相手方と地元の人たちを傷つけ迷惑をかけるからと相手の要求を丸呑みするという優しい心遣いをしていただきました。

昨年立松さんは「二荒」は絶対に残したいと、出版社を変えて「日光」として出版していただきました。日光を色々な形で全国に紹介しようとしてくださったような気がします。

最後に、私は立松さんの関係の方々にお願ひがあります。立松さんが入念な取材を重ねて書き上げた日光が舞台の戊辰戦争を題材にした歌舞伎の台本が書きあがっているはずです。是非、上演がされますよう協力していただけるようお願いいたします。

立松さん、地球の自然、日本の自然。奥日光の自然を天国から見守って下さい。
二十数年のお付き合いありがとうございました。

合掌

○

澄んだ愛らしい瞳の和夫ちゃん

漆原智良

児童文学作家・日本児童文芸家協会顧問

「さあ、お兄ちゃんと遊ぼう。今日は何のお話しをしようかな？」

和夫ちゃんは、澄んだ愛らしい大きな瞳を輝かせ、ぼくに抱きついてくる。

東京大空襲で戦災孤児となってしまったぼくは、戦後栃木県に疎開していた祖父母に引き取られた。が、インフレの波を被り生活は瞬く間に奈落の底に……。昭和二年中学校中退。商家奉公へ。だが重労働に耐えられない。その時、救いの手を差し伸べてくれたのが、宇都宮駅前で古モーターの再生を営む横松仁平氏であった。従業員僅か二名。午後同級生が店の前に立ち止まり、ぼくをじろじろと見つめる。仁平氏は「つらんかんべえ、奥で和夫と遊んでいたらよかつぺ」と、ぼくを優しく気遣ってくれる。ぼくは、和夫ちゃんの生後五ヶ月から三歳まで生活を共にする。やがて日本の景気回復と同時に電機店は倒産する。

三十年の歳月が流れた。お互いの家族が全員そろって宇都宮で再会。その間、ぼくと和夫ちゃんには、それぞれの物語があった。ぼくは八丈小島（現在無人島）の教師になり、その後依願退職して「児童文学の世界へ」。和夫ちゃんは苦学の果て「横を立てにし、父を背負い平に。立松和平として純文学の世界へ」……。言葉紡ぎ出して作品を生む」という同じ道を歩むことになった二人は、「仁平氏の優しさを忘れずに……」「何を書かなければならないか」を源泉に原稿用紙を染めていく。また、読売新聞童話賞、広介童話賞の選考委員や、全国を駆け巡り「自然と教育」のトークショーを行なうようにもなった。立松和平の作品（『楽しい貧乏』『風月』『禅語に生きる』ほか）には、たびたびぼくが登場



してくる。

「人生は瞬く間に終わってしまうのだから、最も大切なことだけをやるべきである」（晩年の著『禪語に生きる』より）が、充実した人生を物語っている。

長男でノンフィクションライターの林心平さん、長女で画家の山中桃子さんが、「和夫ちゃんが積み残した分を必ずや補ってくれる」と思っている。合掌。

○

強きことやきしきこと

大城立裕 作家

立松和平さんとはじめて会ったのは、一九七〇年末から七一年初頭にかけてのことであつたかと思う。私は『早稲田文学』の七一年四月号から一年間、「沖縄通信」を連載しているからである。彼はまだ学生で、『早稲田文学』の編集に関わっていたが、編集長の有馬頼義さんに沖縄へ行くと云つたら、私に連載を頼む仕事を頼まれたという。私の職場にふらつと来て、その話をしたが、初対面ながら彼のことをかねて知っていたような気がする。それとも、その暖かな人柄のせいでそう錯覚したのだろうか。

処女作「途方にくれて」のための旅になつたようで、若いだけに私などの知らないアブナゲな沖縄世界に挑んで、成功した。

琉球新報短篇小説賞の選考委員を、一九七九年から四年間、日野啓三さんもいっしょに務めた。

ある作品がシュールばりの表現で分かりにくく、私は評価しなかったが、立松さんは、「二十年後には、日本の文学はみなこのようになりますよ」と高く評価した。今にして思えば、彼の勇み足に見えるが、彼が自分の文学の方向を占っていたようにもある。立松文学はシュールにはならなかったが、新人とも対等に競いあつて、ともに高く飛翔しようという、願いをこめた発言であつたと言えるだろう。

ある年、彼は選考会がすんだあと、その会場で隣室に消え、私たちが食事をしている間に選考評を、受賞作一編のみに限って書きあげた。私たちは驚いたが、後年の書きかた生かたに観られる骨太の姿勢が観られるような気がする。

生きかた、書きかたは骨太だが、他人づきあいはやさしかった。突然の死には驚くほかはなく、そのやさしさに満ちたまなざしと、栃木弁のとつとつとした口調を思い出すことしきりである。口惜しいことだ。作品『ダカールへ』に満ちた、荒さとやさしさと神を渴仰する世界を、もう一度読もうと思う。

歌舞伎と立松和平さん

大沼信之

株式会社歌舞伎座専務取締役

立松さんは歌舞伎をひとつ遺している。

それが珠玉の作品「道元の月」だ。道元禅師を描いた三幕の舞台で、平成一四年の道元禅師七五〇



年遠忌にあたつて歌舞伎座で初演された。道元禪師を坂東三津五郎、北條時頼を中村橋之助の配役で、その後京都南座、名古屋御園座で再演された。「道元の月」は新作歌舞伎の最優秀作に贈られる大谷竹次郎賞を受賞し、歌舞伎の歴史に小さくとも一つの足跡を残せたと立松さんは心から喜んでゐた。

実は立松さんはその後もうひとつ歌舞伎を書いている。

「道元の月」の後、一本で終わらせたくないとして二本目に取り掛かり、三年かけて完成させている。「黄金の森」と題された、戊辰戦争に巻き込まれた日光山奥の猟師たちの物語だ。猟師たちは昔から自然の中で生き物たちと命のやり取りをしながらも彼らと心を通わせて暮らしてきた。そこへ明治維新という遠いところで起こった嵐が襲来し、射撃の腕があるばかりに彼らがいちども撃ったことのない人間を撃つ戦場に駆り出される。しかも官軍と幕軍の双方から徴用された猟師たちは、仲間同士が撃ち合う局面に立たされる。怒濤のように戦いが去っていった後には、斃れた猟師たちが残される。非常に悲しい結末だが、立松さんは一条の救いの光を加えている……死んだ猟師たちは、彼らが愛していた鹿に生まれ替わって、森の中へ跳ねていく……。立松さんらしい、自然と人との交わり、人為の戦争が無辜の人々に与える苦しみ、人や生き物すべての「命」というもの、などを深く見つめた新しい歌舞伎だ。立松さんの故郷日光の、黄葉がまさに「黄金の森」と輝く美しい自然を舞台にしている。立松さんがこの作品の上演を心待ちにしていただけに、このたびの急逝は悔やまれてならない。

旅・雑感

大野玄妙 法隆寺管主

和平氏とは何度か旅をした。この一月一四日修正会結願まで供に過ごし、その時も二人で、懐かしい旅の思い出話に花が咲いた。今まで我武者羅に突っ走って来たお互いの人生を振り返って、「還暦も過ぎたし、そろそろ速度をゆるめて、また一緒にゆっくり旅をしたいなあ……。じゃあまた」その矢先に届いた突然の訃報。たった一週間違いの兄貴の彼が、あんなに元気に別れたのに……。

平成一三年九月の一二日間、玄奘三蔵の道を辿って彼と一緒に西域・タクラマカン砂漠の旅をした。彼は相変わずリュックサックを背負った出で立ちで、リュックの中には辞書と原稿用紙と万年筆が入っている。折角の旅なのに、隙を見つけてはペンを動かしている彼の姿は今も脳裏に焼きついたまままだ。

又、旅先でも彼は誰に対しても対応が優しく、物売りに囲まれて身動きが出来なくなることも度々で、あまりひどい時は少し押し退けたらというアドバイスにも「僕にはそれが出来ないんですよ」と返ってくる。ニューヨークテロ、九・一一の時、私たちはクチャに居た。そして翌日アクスに移動してこのニュースを聞いた。その時から周囲の空気が暗くなり、だんだん不安が大きくなる中で、その時も彼は傍らに居るイスラム教徒の人々を思いやって、気配りを欠かさなかった。

人生は旅。彼もまた旅人。多勢の仲間を残して、風が過ぎるように彼は一人でゴールしてしまった。あのやわらかな風にまたいつか、どこかで会いたいと思う。

合掌



もう一粒の麦の種

大橋健浩

知床の写真館

立松先生は凄い人だ！ 我々の故郷知床へ風のごとく来られて、北方の守護神・毘沙門天を祀り、そして、聖徳太子堂、観音堂を地元、知床知布泊村長佐野博氏と共に次々と建立されました。立松先生は知床知布泊の荒廃地に一粒の麦の種を蒔きに来られ、そして見事に甦らせてくれました。先生は『人の心から心に届く文学の言葉は、まことに古めかしいことをいうなら、一粒の麦という以上にふさわしい表現はないのではないだろうか。多数に迎えられても刹那のうちに風の中に消滅してしまうのではない、片隅ではあっても根がしっかりと土を噛んで伸びていく。少ない実であっても、豊饒の実を結ぶ。私は原稿用紙一枘一枘に麦の種を蒔いているのだ』と文芸月光のカバー表紙に記されていました。私は雪原知床に住む住民の限りなく深い心の支えに、もうひとつの素晴らしい麦の種を蒔いて逝ってしまった立松先生の偉大さに畏敬の念を覚え、只々感銘するばかりです。

立松先生は微風のようにすつと幾度となく知床に見えられましたが、今回は千の風になって黄泉の国へと旅立たれました。あまりにも早すぎる一生でしたが、どうか我々の故郷知床にどっかり腰を据えて、そして知床の守護神となって知床の自然と住民をいつまでも温かく見守ってくださいませ。

○

「全小説」のこと

岡田林太郎

勉誠出版編集部



立松和平先生とは、四年前にインタビューでお会いして以来、『立松和平 日本を歩く（全七巻）』『日光』『立松和平書評集』『織田信長』『月光』と、たくさんのお本で一緒に過ごしてきました。

また、昨年末には、これまでのお仕事の集大成である『立松和平全小説』の刊行が始まったばかりでした。こんな時代に全三十巻の全集は、先生にとっても私たちにとっても、大きな挑戦になるはずでした。その第一巻が出来上がった直後に、山下洋輔氏と対談した際のテープが手元にあります。その最後に、こんな会話をかわしていました（「編集」が私です）。

山下 しかしすごいね、この全集は。ものすごい。全何巻？

立松 三十巻ですよ。

山下 うわー、すごい。

立松 最後まで到達すればいいけどな（笑）

編集 到達はさせますよ、それは。

立松 してよね（笑）

編集 ええ。

立松 途中で終わりましたってのは切ないな。

先生、あまりにも切ないことになってしまいました。これから刊行される全集をご覧いただけないかと思うと、残念でなりません。



年始には新聞取材の後に、酒席をご一緒したばかりでした。もう二度とお会いできないとは、信じられない気持ちがあります。これからまだまだお付き合いは続くと考えており、きちんと御礼も申し上げずに過ぎてしまったことが悔やまれます。

今後、全集を完結させることが一番の供養であり、先生への御礼と感じております。

立松先生、心よりご冥福をお祈りいたします。

連作「晩年まで」のこと

加藤宗哉

作家・三田文学編集長

立松和平「晩年まで」の連載開始は、一九九九年の四月である。

何かの集まりで顔を合わせ、別れ際の立ち話で立松さんが、「小説、書きますよ」と言ってくれたのが前年の暮れのことだった。そのあと電話をして連載にすることが決まり、期限はナシ、と半ば本気で告げると、死ぬまで書くから、と相手も笑って、「二十枚程度」という連作の約束になった。

第一回目の「銀の花咲くダケカンバの森」は、五十歳になった主人公が友人と山に登る話である。その最後で、山頂に立った二人が、「まだまだやれるな」「当たり前だ。まだまだだよ」と言葉をかわす場面を読みながら、ほぼ同世代の私も励まされているような気分になった。立松さんとは、彼が「早稲田文学」に、私が「三田文学」に出入りする学生だった頃からの知り合いでもあったから、五十を超えての心境をどこか確かめ合うような気持ちも私のなかにはあったのである。



あるとき、原稿のやりとりをしながら、立松さんが不意に、自分も早稲田文学に携わらなくてはいいけないのだが、と言ったことがある。そうなたら協力していろいろやりたいこともある、と言うと、昔の恩返しをしなくてはと思っているけど……と立松さんは歯切れの悪い言い方になった。しかしそれも当然で、考えてみればその頃も、その後も、とにかくいつもこの作家は忙しすぎた。

それでも「晩年まで」の原稿が遅れたことは一度としてなかった。一年の間、四四回の原稿は締切日には必ず届けられ、もちろん休載もなく、そして今年、不意に途切れた。

○

無題

神山英昭

NPO法人足尾に緑を育てる会会長

二月九日、八日の午後、立松さんが逝去されたとの連絡を受けて、驚いた。一月九日(土)日光市内の「東照宮 晃陽苑」で開催した仲間の出版記念パーティーで挨拶を頂いたばかりであるのでなお更驚いた。

一九八〇年一二月、宇都宮市のライブ喫茶「仮面館」で市民塾(足尾)「なぜ、今足尾か」が始まった。ここで彼は講師であり、聴講生でもあった。ここから私と彼との交流が始まった。その後、一九九三年一月立ち上げた「わたらせ川協会」(一九七三年二月足尾銅山の閉山を契機に、足尾銅山や足尾町に関する文献等を集め、残し、後世に伝えていこうとする趣旨。)の賛同人にもなってもらった。一九九六年「足尾銅山の煙害で荒廃した足尾の山に木を植えよう」という運動(足尾に緑を育てる会結成)が一九九六



年五月から始まった。

スローガンは「足尾の山に百万本の木を植えよう」である。このとき、立松さんには、当会の顧問に就任してもらった。第一回目には、百六十人が集い、百本の苗木を植えた。立松さんは、第一回目の植樹デーから昨年の第一五回まで毎年欠かさず参加し、参加者と一緒に汗を流した。そして参加者に呼びかけた。「荒廃した足尾の山に木を植えると同時に、心にも気を植えよう」と。

彼の口癖は、「百万本の木を植えることは、遠大な計画だ。植えた木が枯れてしまったら、また、植えればいいじゃないか。気楽にやろう」そんな彼がもうこの世にはいません。しかし、黄泉の世界から私たちの活動を励ましてくれていると思う。我われは、彼の遺志を引き継ぎ更なる活動の充実を進めていきたい。彼にとっては、宇都宮市がふるさとならば、足尾は第二のふるさとであったに違いない。それほど足尾には思い入れがあった。

いま、足尾の植樹地に、立松さんの慰霊碑を立てようという声が、仲間内から出ている。来年が足尾に緑を育てる会の創立一五周年でもあり、この機会に立松さんの遺志を後世に引き継ぐためにも前向きに検討したいと思っています。

合掌

○

いつかまた逢える時が

菊地秀一 集英社広告部

立松さん、イースター島に一緒に行きましたね。



キリバスも行きましたね。
マルセイユも行ききましたね。
スコツランドも行ききましたね。
知床にも行ききましたね。

六本木で飲みましたね。
恵比寿でも飲みましたね。
銀座でも飲みましたね。
知床でも飲みましたね。
カラオケも歌いましたね。

お釈迦様の話もしましたね。
道元の話もしましたね。
法隆寺の話もしましたね。
永平寺の話もしましたね。
天地創造の話もしましたね。
結婚式にも来てくれましたね。



二十年間のお付き合いでしたね。
めぐり逢えたこと、言葉に尽くせないくらい感謝しています。

○

隋縁趣感

熊谷忠興

元『傘松』編集人・岩手県正洞寺住職

立松さんは「縁に随い趣に趣」さつさと涅槃に行ってしまった。時が、人を求めたのか、彼が縁に応じたのか。

時あたかも大本山永平寺は平成一四年に開祖道元禅師の七五〇回忌を迎えていた。たまたま、本山の機関誌『傘松』の編集にあった小生は、記念に道元禅師についての連載物を模索していた。

道元禅師伝の執筆をお願いし快諾頂いた。更に多くの方々が彼に出演を求めた。彼は気さくな性格からか、それに応ずることとなった。NHKの福井支局等が当時百歳の宮崎奕保禅師との対談を始めた。同時に道元禅師中国への旧跡取材をする等その様子は全国放映となった。百歳の禅師と彼が対談する姿は、雲遊^{うんゆうひようき}評寄する道元禅師が如浄禅師に法を問う姿を彷彿してならない。

『傘松』誌連載の方は道元禅師の伝記はもとより著述『正法眼蔵』とも対峙することとなった。

時に東京の郡司博道老師という方に助言をうけて「右門でございます」から始まる小説を書きはじめた。これは立松方式、道元禅師になろう。傘松掲載は約百回に及んだが、彼は書くことが修行だと頻りに吐露されていた。

また、縁とは不思議なもので依頼され歌舞伎「道元の月」という原作をものにした。

平成一四年三月、坂東三津五郎の道元禅師に扮する上演が好評を博した。それは初めてのとり組であり、歌舞伎座に通い助言をうけ十回も書き直した作品であつた。

小説「道元」は一冊に纏められ上梓され、二つの賞を受賞した。一昨年京都で行われた「親鸞賞」受賞式に参列した。その時の「熊谷さん」「熊谷さん」……と呼ぶ声が耳朶にのこっている。

立松さんは宮崎禅師より「病膏肓やまいこうやうに入る」という言葉を聞いたか否かわからないが、二豎にじゆに罹り他度に赴かれた。

○

有難う、立松さん

黒神直也

月刊「大法輪」編集部

大きな風穴が空いた。どこに。僕の心に：急いで行くのはうまくない、あちこち寄り道して色々な所で仲間をつくって、時には雨に濡れ泥にまみれ、風に吹かれて、そして陽の光に感謝する生き方をあなたから教えてもらいました。なのに。

今年最初の原稿と一緒にもらったファックスにはこうありました。

「今年もよろしくお願いいたします。原稿仕上げたかったのですが、できなかったもので、できた分だけ送っております。明朝法隆寺でいつもの行をするので、残りは法隆寺から送ります。

二〇一〇年一月十一日 立松和平」。



例のマル文字を読んで、ああ、きっと元気で奈良に行っているんだなあ、と思っていました。

「一緒に修行に行こうよ、随分といいもんだよ」と立松さん、いつか僕にいいましたね。休暇をとって行けばよかった…。

連載「良寛」の次のプラン、いつものお店で話し合ったのは晩秋のこと。立松さん、ほんとうに有難う。僕はやつと無常ということを学びました。

○

人の生と心 見詰め続け 立松和平氏を悼む

黒古一夫

文芸評論家

訃報に接し、思わず口に出た言葉は「何で」であった。というのも、一カ月ほど前、「週刊読書人」の巻頭対談を終えて、毎年恒例の忘年会が昨年できなかったので、新年会をやろうと一緒に食事をしたのだが、その時はすこぶる元気だったからである。その席での話題はもっぱら刊行が始まったばかりの「立松和平全小説」(全三十巻、勉強出版)についてであった。わたしが全巻の編集、解説を担当し、立松氏は回想記を連載するが、二年半後の完結までお互い頑張ろうと確認し合ったのである。

立松氏は、氏がまだ早稲田の学生だった一九七〇年二月、「早稲田文学」に「途方にくれて」が掲載され、文壇デビューを果たすが、以後今日まで四十年間、数多くの小説やエッセー、紀行文などを書き、テレビやラジオに出演し、環境問題や社会的問題などについても積極的に発言してきた。

わたしは拙著「増補 立松和平」(九七年)の副題を「疾走する文学精神」としたことがあるが、今改

めて立松氏は四十年間「文学」という荒野を休むことなく走り続けてきたのではないかと思っている。「生き急いだ」などとは決して言いたくないが、頼まれると嫌と言えない優しさ故に、締め切りの迫った連載を傍らに講演を引き受け、取材に応じていた立松氏。会うたびに「小説が書きたいんだ」と言っていたが、もう少し余裕を持って依頼をこなしていたら、と悔やまれてならない。

そんな立松氏の文学だが、最大の特徴は、近代文学の「王道」思想と言っている、「人間、いかに生きるべきか」という問いをどの作品にも底流させていたことである。しかも、その問いは高踏な思弁によるものではなく、庶民＝普通の人々の「生の現場」を凝視するところから生まれたものであった。さらに言うならば、氏の文学は、社会や歴史の現実と必死の思いで格闘する人間を描き出すことであるべきわたしたちの生き方を示唆するところに、もう一つの特徴があった。

出世作となった「遠雷」（八〇年）とその続編「春雷」（八三年）、「性的黙示録」（八五年）「地霊」（九九年）は、その見事な結実にはかならなかった。また、立松氏がひそかに「生（死）の三部作」と呼んでいた「日高」（二〇〇二年）、「浅間」（〇三年）、「日光」（〇八年）は、「生命」と「自然」との根源的な関係を描いた佳品で、読者がおのずと生命いのちのありようを問わざるを得ないものになっていた。「木喰」（〇二年）や「芭蕉」（〇七年）、大作「道元禅師」（〇七年）など仏教者や遊行者を描いた作品における「求道」も、究極的には人間の生と心を見詰め続けた精神がもたらしたものであった、と言っているだろう。

そんな文学的特徴を持つ立松氏の「新作」を、わたしたちはもう永久に読むことができない。何とも残念であり、悔しいとしか言いようがない。六二歳は、あまりにも若い。道半ばにして倒れた立松



氏も心残りだろうが、「新作」の読めないわたしたちもまた悲しい。

(時事通信配信)

○

学生時代のように

見城美枝子

認定NPO法人ふるさと回帰支援センター理事長

和平さん、時の経つのは早いものです。同じ早稲田同士、若い頃から接点はあったのですが、一緒に仕事をするようになったのは一九九八年の白神自然文化賞からでしょうか。お互い、白神山地の環境保護の活動に関わる方たちの審査に携わりましたね。でもその時も和平さんは忙しいようで、大きいリュックを背負っては各地から到着していました。

ふるさと回帰支援センターの立ち上げも一緒でした。和平さんは理事長、私は理事ということで、様々なイベントで協働してきました。和平さんのスピーチにはふるさとの空気というものがあつて、しみじみよかったです。ここでもリュックが一緒でした。本を書いている、といつも言っていましたね。

日本ペンクラブでは私が久々に出席をして、どこに座ろうかと戸惑っていた時、和平さんと目が合いました。昨年の五月二五日のことです。今まで欠席でしたがなぜかこの総会から出席を決意し、ペンクラブのために動こうと思ったのです。和平さんの隣に座りました。なんだか学生時代に戻ったような感じで並んで議事進行に耳を傾けました。来年、つまり今年の九月に国際ペン東京大会が開催されるので、総力あげて世界のペン会員を迎えようという話です。和平さんが、平和委員会へ入って一

緒にやってよと誘います。私はオッケーと受けて、では今後のためとお互いの携帯番号を教えあいました。何年もの間、何度も一緒に仕事をして来たのに、思えばそれまではお互い直接に連絡をするとはなかったのです。集会の最中にピピッと携帯に番号を入れあう状況に、和平さんはあのあだけない丸い目で笑って、「お互い若かったら、ここからドラマが始まるんだよなあ」とつぶやきました。最終通話日時二〇〇九年一〇月八日一四時二〇分。ふるさと回帰支援センターで和平さんを待つている時にかけた通話記録が私の携帯に今も残っています。

和平さん、安らかにお休みください。

早過ぎて……

小嵐九八郎

作家・歌人

文学的には遙か先達の立松和平さんですが、大学では私の方が二年先輩となります。

バリケードの中で麻雀をやりましたが、三味線を鳴らすとか、二ピンと八ピンを切って五ピンで待つとか、闇テンであるとかとは無縁の、堂堂として優しい打ち方でした。まだ、横松くんの時代です。学生運動の炎の時でした。彼は元気のあつた中核派、社青同解放派、共産主義者同盟、黒ヘルの諸君の全てと仲良く、含みこむ眼差しを持っていたことも鮮やかです。視野が、若い頃から広がったのです。監獄で観て、読んだ『遠雷』は、忘れることができません。人類の土への焦れとあこがれと再生の祈りが訥訥と溢れていました。



また、やっと仏教に関心が向いた当方に、『はじめて読む法華経』で、人に軽んじられても布教をしてやまぬ善意の常不軽菩薩を教えてくださいました。

連載中の『良寛』（「大法輪」）で、いよいよ良寛が六十三歳にして、おのれの死と他者の死を同じく考える地平にきたのは、縁なのでしょうか。作者の立松和平さんも、六十三歳……。

やっぱりお釈迦さま、早く迎え過ぎですよ。

それとも、旅好きの立松和平さんを銀河への旅へと誘ってしまったのか、お釈迦さまは。

○

枅の机と和平文庫

小勝政一・サト子・圭・空

友人・福島県南会津町舘岩

枅の机（立松和平）

私は自分の部屋でいつも森の香りに包まれている。机が枅の木の厚さ十センチに近い一枚板でできているからだ。この机はたえず芳香を放ち、私の気分を安定させてくれる。いいものを書くのだよと、机がたえず私を励ましてくれるのだ。……（中略）

和平さん五十歳の時の、書斎が紹介されている写真。乱雑に積まれた本棚の前、枅の机に和平さんが座る。僕が依頼を受け地元の木工さんをお願いした。

書斎を狭くした一枚板の机を見て、美千繪さんは「物書きをやめたら、酒を飲むカウンターにするね」と、気に入ったような困惑したような。

和乎さんとは出版社の取材で知り逢った。当時和乎さんは作家よりもテレビのレポーターとしてのイメージが強く、一度も読んでいない和乎本を取材までには読もうと思うにも、地元の本屋さんには並んでない。注文するも中々手に入らなく困った事を思いだす。「政一、今度はテレビで取材に来るよ」と間を置かずに来てくれた「心と感動の旅」(二月八日)が放映されるや、役場の三本の電話が鳴りっぱなし、「裁ちそば」「トチモチ」「豆腐」「赤かぶ」が一躍脚光を浴びることとなる。

館岩に残る茅葺き屋根の曲家集落を「ふるさとの原風景」と。何とか残せないものかなと、友人からもうなどしてたまった本を集めた「和乎文庫」での応援を約束してくれた。絵本「おじいさんの机」は、館岩から生まれたと、子どもの通う小学校での朗読会を開かせて頂き、圭ちゃん、空くんのお父さんの友達だと紹介され、はにかんでいた娘が高一、息子も中一となる。

和乎さんから送られた多くの本と、枳の机で居場所を失った以前からの古い机が、全集の発刊に押されるように「和乎文庫」の開館を待っている。

「政一、まだかな」と、ダンボール箱を開ければ催促の声が聞こえそうです。

立松さんの遺してくれたもの

小島岳彦

東京書籍出版事業部編集長

立松さんの遺してくれたものは何だったか、毎日考えている。

立松さんの言葉。



「仕事は、書くことは、修行だと思っている」といつも言っていた。『道元禅師』を永平寺「傘松」に連載していた頃だ。毎月二十枚弱、十年間。

修行なのだから、楽しさや見返りなんてはなから期待してはいけないのだろう。辛ければ辛いほどいいのだ、修行なのだから。いま自分に向けてそう考える。

一三年前。私の故郷館林で講演があり、そこが舞台となった新刊の『毒』の話をしてくれた。私の両親も聴きにいった。立松さんは壇上で私の名前を挙げてくれた。「小島消防の息子さんが担当だけど、知ってつかい？」と。母親は涙を流して喜んでくれた。私が唯一できた親孝行だったかもしれない。その後すぐに母は亡くなり、今も仏前に立松さんからの香典袋が置いてある。

立松さんの通夜が行われた法昌寺。私が「毒」の執筆のお願いをしたのは、その座敷だった。私の故郷の物語を書いてください、と。その場で執筆を諒解してくれた。私とは、なんの義理もなかったのに。まさかそこで立松さんを送ることになるとは。

自慢してもいいかもしれない。一一冊の本。いくつもの文学賞。ベストセラー。一緒に金沢や、島原や、秋田や、足尾には毎年行って温泉に泊めてくれた。

そういえば足尾の温泉で、私が間違って女湯に入ったことを立松さんが大笑いしていて、翌年、立松さんが女湯に入ってしまったってまた大笑いしたこともあったつけ。

絶筆となった『毒』第二部のグラを今日も読んでいる。近く刊行。予定していたのは、『国定忠治』『寇』（元寇をテーマ）『幕末』。傑作に決まっている。

土俗の仲間

小檜山博 作家

立松さんは三十年前のある日、突然、札幌のぼくの前へ現われ「あんな小説を書く奴の顔が見たくてきた」と言つて笑つた。ぼくの「出刃」という小説のことらしかった。嬉しかった。彼も「遠雷」を出版したばかりで、まだ宇都宮に住んでいた。初対面だった。

その夜ぼくらは朝までススキノを飲み歩き、カラオケでぼくは十曲歌い、立松さんは「網走番外地」だけを六回歌つた。それを聞きぼくは、この男はなかなかできる、と思つた。

その後ぼくが東京へ行くたびに飲みに付き合つてくれ、モンゴルへ行くのに誘つてくれたり、ぼくの単行本や全集の書評を書いてくれたりした。奥野健男さんと立松さんとぼくの三人で、NHKで「現代文学に現われた農民像」のタイトルで鼎談したり、ある雑誌で立松さんとぼくで「農と文学と人生」との題で長い対談をしたが、立松さんは常に地方で生まれ育つた人間にしか見えないものを核にした主題を展開して普遍を探り、ぼくと共通した。それは嬉しかった。

いつか立松さんと中上健次とぼくと飲んで酔っぱらつたとき、自分らの書くものが土だとか風土、自然、露地とか、どうも泥のにおいがする感じが多いという話から、誰言うともなく、俺ら「土俗の世代」つてとこだな、と言つて笑つた。その笑いは明るかった。

その「土俗の世代」の、立松さんまでいなくなり、ぼくは言い知れぬ憤怒に震える。



最後の旅

齋藤達也 清遊舎代表

去年の暮れ、大雪の新潟に立松さんは来た。書き下ろしの新作『良寛との旅』の取材が目的であった。年頭恒例の法隆寺での修行を別にすれば、これが立松和平、最後の旅となった。こちらで用意したゴムの長靴を履いてもらい、雪を踏み分けて、与板の塩之入峠や紫雲寺の観音院、岩室の一本松など良寛ゆかりの事跡を案内した。「道元を思想を心身ともに体現したのは、良寛だ」と言った。良寛は、長く私の向き合っている禅僧であり、詩人である。降りしきる雪の中を、私は立松さんと歩き続けた。こんなに楽しい雪遊びはなかった。

二十年前の春、初対面の編集者であった私が差し出した企画書を見て、「面白いことを考えるね」と快諾の笑顔を見せ、ともに仕事をしてくれた。大冊の追悼文集は『水晶の死』と名付けられて出版され、話題になった。以来、友と、ひと回り年下の私を立松さんは呼んでくれた。初めて会ったとき、「これを読みながら、インドを放浪したんだ」と黒いカバーをかけた岩波文庫の『ブッダのことば』を持たせてくれた。仏教は、二人を結びつける絆であり続けた。

旅の途中「これから、法華経の訳経僧、鳩摩羅什を小説に書く」と言っていたが、立松さんと私には、宮沢賢治作「ひかりの素足」をともに見据えたその向こうに、「菩薩三部作」という物語の企てがすでにあった。白い世界の中で、これから出す本のことなどを存分に語り合い、夜は越後の酒を酌み交わした。

長岡駅で見送ったとき、「楽しかった」と言ってくれたが、それきり神隠しのように、私の前から

立松さんはいなくなってしまった。病床で最後にご覧になっていた自著が、私の編集した『良寛のこ
とば』であったと奥さんの美千繪さんから電話でうかがい、涙がこぼれた。それでも、繰り返し耳に
響いている言葉がある。立松さんとの旅は、いまでも続いているのだと感じている。

○

無題

坂上弘 作家

立松和平さん、あなたは私から見ても、もともと仏教者だった。私の知る小説家のなかで。あなたが
若い頃から、そう思っていた。亡くなったことがテレビで報じられたとき家人は、一度家にきてくれ
たあなたを覚えていて、電話でも何度か声を聞いた方、と、悲しんでいた。あなたが三十年余り前「文
体」に書いた長編の題は「光匂い満ちてよ」だ。いま思っても、いい題だな。近年「三田文学」に連載
していた小説は、あなたの祈りがでていた。最後にあなたに会ったのは、昨年の早春、妙心寺展の最
後の日の会場だった。白隠の書を人垣のうしろから眺めていた。あなたは私のすぐ前にいた。あな
たがふりかえって目が会った。あッ、ワッペイちゃん、と思わず声をだしてしまった。あなたがそこ
にいるのは当然と思えた。童顔が白隠の達磨に似ていてうれしかったが、人目もあるのでワッペイさ
んというべきだった、と反省した。もうあなたに会うことはできないが、声を聞くことはできる。永
遠に。合掌。



光の雨 再挑戦

坂本忠雄 元「新潮」編集長

元文芸雑誌編集者として立松和平さんとの関わりで最も鮮かに思い出すのは、一九九三年「光の雨」盗用事件で彼にマスコミの批判が集中していた時のことである。

当時「新潮」編集長だった私は「すばる」の連載が中断されたこの作品をどうしても彼に再挑戦させたかった。担当の柴田光滋君と彼の事務所を訪れると、いきなり坂本龍馬に扮した彼の写真が目に入った。それはその頃テレビに盛んに登場し、時代の寵児だった彼の一面をよく現わしていた。この事件はその後「すばる」誌上で原資料の借用を認める彼の謝罪文で「和解」が成立したが、彼に浮足だった隙があったのは否定できないと思う。

後年彼は『ぼくの仏教入門』で「本当におまえが書きたいんだったら、世間からなんと言われようと、とにかく命懸けで書くべきではないか。作家ならそうすべきだ」と編集者が叱咤したと書いている。「おまえ」を「君」とすれば私の言葉に間違いはない。

私はマスコミの風潮に単に反発したのではなく、作家は生涯に一度書き残しておかなければならない作品がある。連合赤軍事件の主謀者達と同世代の彼にはこれを完成させる責務があるという一念から迫っただけである。

やはり同世代者の柴田君の精力的な督励があつて、五年後に「新潮」一九九八年二月号から三回の短期集中連載で九百枚の完成稿を掲載できた。毎回校了直前の深夜まで社内では表現をめぐる三人で徹底的にやり合ったのも今は懐しく蘇ってくる。

改めて読み返すと、老いて死の迫った元首謀者が若者に語るといふ構成を創り、真の革命家たるべく「総括」し、次々殺されていく凄惨な状景をたじろぐことなく書き進めていく、彼の深い闇を蔵した作家魂に感嘆する。

彼は今彼岸の光の雨の中へ旅立った。

○

信念と余裕の人

笹川悦導

曹洞宗観音庵住職

平成一三年の秋、観音庵主催「仏教文化講座」の講師に（株）ウェイツ社長の中井氏を通じてお願いしてあった。

午後一時からの講演時間がせまり、百七十余名の聴衆が狭い本堂いっぱいになって待っている。十五分前「中井さん立松先生まだですか？」あせり始めた。本当に来て下さるのかも心配になってきた。「携帯持っていない、事務所もお休み」十分前、七分前。普通は、おそくとも三、四十分まえには到着されるのに、観音様にひたすら祈った。

見えなかったらどうしよう、いまさら代理はお客様には知らせてない。六分前、五分前、冷汗が体中に、神経と鼓動が極限に達した。と、突然山に行くような格好の男性が境内に入ってきた。

「あつ来た」中井氏が飛び出した。立松先生は「まだ二、三分あるよ」と、にこにこ。血の引くような思いで立松和平先生をお迎えした文化講座が、出会いのはじまりであった。



お饅頭を一口でほおばり、一杯の茶を美味しくそうにゴクリと飲んで聴衆が待っている本堂へ。入るなり、「道元の月」のポスターが目に入ったようで、「やあ、出来ましたか：ここではじめて見ましたよ」御話の冒頭は歌舞伎「道元の月」の脚本書き直しの裏話でもりあげた。

そんなご縁から一人娘の桃子さんが茶の湯に入門してきた。御父さんの生き方の姿勢か、茶室の出入り前後には必ず本堂の前で合掌一礼している姿があった。嬉しかった。

この仏心を育てたいと思い、かねてより念願であった本堂外陣の天井七十枳に四季の草花描写をお願いした。一つ返事で快諾頂き、大作は三年を費やした。

落慶法要の日ご両親が足を運んでくれた。パリッとしたスーツにネクタイをしめての身なりはイメージとはずれていた。

「うわあーすごい：描くとは聞いていたがこういう絵とは知らなかった：」万感の喜びがあふれ「こんなんでよかったのでしょうか：」と、という言葉の中に親としての娘を讃える愛情があった。

立松和平先生は、とらわれない、こだわらない、山より高く、海より深く自在に心を巡らせ、温かい訛り言葉と相手を思うやさしさ、過酷にちかい行動力、無常なる時を惜しむことなく命を燃焼された。桃子さんの美しい天井画は父への永遠の供養となるでしょう。

冥福を祈り合掌しております。

二人で起ち上げた知布泊村

佐野博 知布泊村村長

立松さんとの出会いは三十年程前になります。少し前に体調を崩したと聞きお見舞いに行つて、「お互い仕事を少しセーブしていこう」と話をしたところでありました。まさかこのような別れが来るとは考えてもいませんでした。

共に過ごした三十年間の出来事を思い出し、書き留めようとしたが、あなたが残した思い出は尽きませんでした。そのなかで一番の共同作業は二人で知布泊村を起ち上げたことです。仲間との憩いの場にしようとの思いで起こした村ですが、心のよりどころとしてお堂のようなものがあればいいねと立松さんに相談したところ、東京下谷法昌寺の福島住職を紹介してもらい、神仏集合の毘沙門堂を設立して頂きました。また、翌年には法隆寺前管長であります高田氏も村を訪れてくれて立松さんと共に知床は世界自然遺産の登録を目指すべきだと声を上げ、現在の道しるべをつけて下さいました。その後、村のお堂は聖徳太子殿、観音堂とで知床三堂として宗派を問わず全国の高僧が集い、年に一度例祭を行うに至りました。

また忘れられないのは、「一緒にパリ・ダカルラリーに参加しよう」と誘われたことです。一ヶ月の命がけのレースを終え、ダカルに着いた時は「俺たちは兄弟だ」を男泣きにくれたのを思い出します。

常に環境や平和のことを考えていたあなたはテレビ、本を通して知床のすばらしさを全国に発信してくれていました。例祭で全国から多くの著名人が参拝に訪れてくださるのもあなたの自然保護活動、



平和活動が根付いた証拠です。私達はいつもあなたに無理なお願いばかりで、あなたの体の一部を蝕んだかもしれません。お許しください。

先日奈良に行ったところ皆さんから「知床に立松さんが根付かせた例祭とお堂がある限り、私達は毎年知床を訪れます」とのお言葉を頂きました。あなたが残してくれたすばらしい財産を後世に繋ぐことが私達の役目です。やすらかに、そして天国で私達を見守って下さい。

○

新聞の連載記事有難う

清水光雄

元毎日新聞社会部長

「新聞は時代を映す鏡」と自負して新聞記者人生を送ってきた私にとって、立松さんは新聞に必要欠くべからざる人だった。彼の生き方、文章、語る言葉が我々団塊世代の感覚、気分や実感を敏感に反映していたからだ。

社会部デスク時代、東京の光と影を描く企画を考えた。バブル崩壊が始まった九〇年代初めの首都を舞台に、我々の心象風景を文章と写真で鮮やかに映し出してみたかった。ただ、題材が東京とあつては、余りに茫洋としている上、似たような企画記事はそれこそあまたある。それでなくとも連載記事は物事の感受性に優れ、そして文章がしつかりしていないと読者をひきつけることが出来ない。評判を取るものにするには現役記者では荷が重過ぎる、と踏んだ。「和っ平さんに頼んでみるか」。当時、彼はテレビに、連載にすさまじい数の仕事をこなしていた。出せる原稿料も格安だ。学生時代からの

飲み仲間だが、引き受けてもらえるか。「清水のためなら、やるよ」と二つ返事だった。タイトルも自分で「東京楽苦園生活」と名づけた。第一回目は「夕焼けとんび」初め、三橋美智也の幾つかの歌詞を引き、東京が持つ磁場の強さが地方を衰退に追い込んでいる悲しみを書き、「地方の良いものはすべて東京に吸収されてしまった」と結んだ。地方から東京の大学へ出て仕事も都会で続ける多くの団塊世代は、故郷を捨てた感覚にとらわれている。胸にキュンと来る話だった。ゲラを読んだ一回り上で都会っ子の編集局長も「泣かせるね」と褒めた。週一回の連載は約一年続き、成功裏に終わった。

○二年、中部本社編集局長の時は、東海地方を歩いてもらう「もの語る旅」をお願いした。紀行文の名作、司馬遼太郎の「街道をゆく」は二五年間続いた。大先輩の向こうを張る心意気で始めたが、依頼した私が二年間で東京に戻ってしまった。それでも彼は○九年まで三百回を超えるまで書いてくれた。

私が頼んだ原稿で忘れがたい一つに、ガンで死亡した私の妻の闘病記に寄せてくれた「あとがき」がある。

『それ相応の年代になった私たちは、友や家族、やがて自分自身の死を、可能な限り平静に受け止めていかねばならないのだ。これから永遠の別離が幾つも待っていて、やがて自分が去っていく。

「一緒に年取れずにごめんね」

死が逃れられないと知った妻が夫に残した言葉である。人は愛する人に対してこんなにもやさしくなれるのだ。人の本性とは慈悲であると思いたくなる』



和つ平さん、五〇歳の時の文章である。一一年後の今、盟友もまた慈悲の人であったという感を深めている。その死に、「やがて自分も去る」と自らに言い聞かせ「平静であれ」という諭しに従おうと思う。

○

托鉢ですか、和平さん。

菅原文太 俳優

不意にいなくなった和平さん。托鉢にでも出かけたのかな、そう思えるし、またそう思いたい。

知床の毘沙門祭と上野精養軒での法隆寺さんの集い、年末の飲み会ではだいたい毎年会っていたが、たいていはお互いに家族連れ。和平さんを大好きな友達や家族に囲まれて微笑んでいた和平さん。この歳でオレが農業を始めたときも「快拳です。」と一言だけの手紙をくれて、株主になり応援してくれた。彼岸に托鉢に行った和平さん、畑の実りはご家族たちに必ず届けるから。

○

誰もできなかつた社会貢献

杉田亮毅

日本経済新聞社代表取締役会長

立松さんの急逝は本当に衝撃だ。今も信じられず、残念でならない。自然と人間を愛する作家として、独特の地歩を確立したが、この十数年、立松さんが実行した「知床で平和を祈る大祭」は、他の誰も企画できない社会貢献だ。同じ仏教とは言え、多宗派の高僧達が毎年一堂に集まって、知床の環

境保全と世界平和を祈る光景は、日本のみならず、世界のどこにも見られない。

立松さんとは、法隆寺の大野玄妙管長ともども、「聖徳太子を歌舞伎にできないか？」と語り合っていたところだ。残念だ。仕事で無理が重なっていたのだろう。「あまり悲しむなよ。オレはここにいるよ。」とあの特徴ある声が聴こえてくるような気がする。

合掌

機縁の訪中

鈴木貞美

日本近代文学研究家

立松和平とは、彼が疊敷きの『早稲田文学』の編集事務所にいたときから互いに見知っていた。が、急速に接近したのは、一九八四年秋、日中青年三千人交流の旅だった。尾崎秀樹氏を団長として、八人の作家、批評家と日中友好協会のスタッフ、参加メンバーと一緒に上海、西安、北京を回った。どこへ行っても、立松和平が人気の的だった。立松は「和平という名に、こんなに感謝したことはない」と繰り返した。そのときのエピソードはいろいろあるが、とりわけ北京で、陳建功、鄭万隆らの作家たちと夜を徹して語りあったことが忘れられない。むろん、通訳を介してだった。

その通訳の青年が、われわれの交流の熱気にあてられ、立松と私をあてに、前触れもなく来日。あわてて相談したが、われわれにそんな力はない。彼の生活費の足しにするため、私は光が丘団地で、小さな中国語の勉強会をつくるのがやっとだった。その会にも、立松は二度ほど顔を出したと思う。



陳建功、鄭万隆と互いの作品を翻訳しあうなど、交流は続いた。立松も何度も北京で彼らを訪ねている。陳建功は、いま、中国作家協会副会長。その通訳氏も、いま、日本で活躍している。私は、いつしか、一年に何度も訪中するようになった。そういう様々な機縁の旅だった。

その訪中団で一緒だった中島梓（栗本薫）、杉浦日向子、檀山扶二夫、高橋克彦、井沢元彦、清原康成のうち、前の三人はすでに逝っている。「八人のうち、四人も……」と妻に言われて、ぎくつとした。こちらは、いったいどんな機縁なのだろう。

立松和平は、情の篤い人だった。そう改めて思う。私は彼の友情に深く恩義を感じている。私の方は小さな立松論を書くくらいのことしかできていない。残念無念のままになった。

○

和平さんとのこと

鈴木基司 小児科医

二三才の秋だった。早稲田の五年生だった私は、「闘い」にいき詰まり、やるべきことを見いだせないまま、仲間と「群れる」ことだけはなんとか続けていた。そんな折、先輩の彦由さんから、「小説を書いているやつだけど、体験話を聞きたいらしい」と紹介されたのが、貴兄だった。

阿佐ヶ谷の古アパートの一室、初対面の私たちは数時間を過ごした。

貴兄の質問は的確だった。早稲田の「闘い」で（私が）考えていたこと、感じ取ったこと、何が起こり、何が足りなかったか……話は「取材」の枠をこえ、気がつけば、お互い「共同体験的深み」に嵌って

たのだった。

その十数年後、彦由さんの体調不良を契機に、新しい関わりが始まった。貴兄は「行動的作家」として活躍、私は小児科医となっていた。そも、「健康」には関心のない連中が周囲には多く、いかに自身の納得とやり方で生きるか、が問題で、体は後からついてくる、そんな生き方の象徴たる彦由さんを、何とか医療に繋げたい、ということと「群馬での健診・温泉つき呑み会」とあいなった。

高橋公が事務局となり、忙しい貴兄の日程に合わせて私が旅館設定（時に貴兄が設定）、という流れで、一九九四年から年二回、一泊二日で「群れる」習慣が始まった。同時に、別稿のように「句会」も始まり、長文小説とは（おそらく）勝手の違う貴兄の作句姿が初々しく、なぜかみな嬉しかった。

そんななか、彦由さんは逝き、そして今、貴兄が大動脈瘤乖離で……。

この十年近く、貴兄は大動脈弁に絡む問題を抱えながら怯まず、精力的に生ききった。私の「医師的立場」からの話は野暮で小さな問題のようにみえた。

私はもつと「医師の立場」に徹すべきだったのか？ しかし、そうはできなかった。同時代の課題を、我がこととして担い、書ききろうとする貴兄を前に私はたじろいでいたのだ、と今にして思う。

句会記録

鈴木木の別稿のように、一九九四（平成六）年、彦由さん（故人）、高橋公さん、立松和平さんを中心に健診付き温泉行が企画された。早稲田時代からのつきあいである私が勤務する病院に寄り、負荷心



電図や採血などを行い、その後車で宝川温泉に向かった。旅館で夕食会をやっているうちに、「俳句でもやってみるか」と高橋公らからの発言、早速大部屋に帰って準備。

和平さんが筆ペンで以下のように前口上。

一九九四年四月十六日

友あい集いて宴す。またよきかな。古来より文は人をなすという。酒宴の後、句会をなす。（和平）
紙を回し、下記の順に句を書く。

われもなく 君もなく 花もなし （三島浩司）

残雪に 菜の花匂う 上州路 （藤田和芳）

北斗星 せせらぎの音 友集う （高橋公）

来る春に 大慈大悲の 立ち小便 （彦由常宏）

雪解けの めるむ野天に 身をまかす （鈴木基司）

花いかだ 山をころがる 川の音 （立松和平）

呑み足りない面々は宿に岩魚酒を追加注文する。岩魚を酒で浸した朱塗りの大杯が届き、一同感激し、回しのみしつつ詠む。

夜も更け、宿に所望せし骨酒を飲みて詠む（和平）

酒冷えて 眠りにしずむ いわなかな

宴の果て 帰るとこない いわなかな（以上和平）

なお、最後に酔った六名で検討した結果、下記の句が「最優秀句」とされた。

大杯に 岩魚ねている 春の宵（高橋公）

一九九五年四月二八日

上州宝川温泉にて右集い、酔うており。去年こぞにならいて句会でもせんとしてするなり。（和平）

春雨や 湯あみのあとの 旅役者

徳利に 山の音して 大宇宙

我立ちて 若葉に染まず 山桜

野仏を 父と思いて 湯あみかな

水の流れのように生きてゆきたい（以上和平）

以後も句会は毎年続けられました。



生真面目な顔 忘れられず

高井有一 作家

行動派の作家として多彩な人生を送った——立松和平の計を伝える新聞記事の一節にそうあったのに、私は苦い思いで見入った。内部の何者に衝き動かされたのか、社会に進んで加わるための行動と、膨大な量の執筆の絶え間ない繰り返しが、遂に強靱だった筈の彼の体力を超えてしまったのだと思えてならない。

彼とは三度、中国旅行を一緒にした。十人足らずの仲間が同行した暢気な旅だったが、彼一人は暢気ではなかった。列車や飛行機で移動の際には、席に着くなりノートを取り出して詳しい日記を付け、夕食後にみんなで一杯やるときにも、これから記録の整理をするから、と言って減多に加わらなかった。そして帰国して数日後に編集者に渡す約束の旅行記は、成田に帰着したときには、既に出来上がっていたのである。

私はいささか呆れて、少しは遊び心に身を任せたらどうだ、と言ってみたが、そんな生ぬるい言い種に耳を藉^かす彼ではなかったであろう。

彼と知り合ったのは、一九六〇年代末の「早稲田文学」編集室である。編集長の有馬頼義氏が、たまたま彼の習作を読んでその才能に着目し、「この作者には何でもどんな書かせよう」という事になったのである。編集委員の一人として、私も協力した。

その時分の編集室は、若い文学青年が大勢出入りして賑やかであつた。そこへしばしば原稿を持って現われる彼が「ワッペイちゃん」と呼ばれて親しまれるようになるまで、時間はかからなかつた。



いつか雑誌の合間に「ワッペイの文章は、馬から落ちて落馬して、といった風な文章だ」とけなした男がいた。確かに彼の若書きには、文章の弛みが目立つ場合があったから、私も進んで尻馬に乗った。そのときの彼の頬を膨らませ、口を尖らせた不服顔は、今思い出しても可笑しい。やがて彼は周囲の群から脱け出して、あちこち一人きりの旅に出掛けて行くようになる。

彼の早過ぎる死を知ったあと、私は短篇集「晩年」を読み返した。自身の周りから彼岸へ旅立って行った人々を語った連作集。「一人一人を惜別の念とともにいていねいに見送りたいと願う」と彼は後記に書いている。

作品の雰囲気はどれも静かである。作者の父親と同じく、長い苦しみの末に死んで行った人も^{すくなく}なく、愁嘆場にも事欠かないのだが、それ等の熱気は冷めて、隣の椅子に坐っていた人が、黙ったままつと立って、どこかへ去ってしまったような印象が遺る。そうなったのは、近年の彼が仏教に傾倒を深めていた事と関係があるだろうか。

中国旅行の途次、あれはどこだったか、寺院に飾られた仏像の前に立って、彼が頭を垂れ、凝と合掌していた事があった。そして、長い祈りのあとようやく歩き出した彼は、ふと私を顧みて、仏教の力は偉大だ、と呟くように言った。彼が何を考えていたか、むろん解らないが、彼の、にこりもしない生真面目な表情は今も忘れられない。

(朝日新聞夕刊 二月一三日掲載)



生きいきとした不快

高橋敏夫

文芸評論家・早大教授

誰にも、ここからはじまった、ここから歩みだした、という光景があるのだとしたら、わたしにとってその光景のひとつが立松和平の「荒れた光景」なのは、もう、はつきりしている。いまでも、それから初期作品を一字一字辿り読んだときの、むせかえるような不快感がよみがえる。

別の現実へ別の関係へというきれいごとは封印する。この現実へこの関係へとみずからを閉じこめ、声がかすれてなお悲鳴をあげ、吐瀉物がなくなつてなお何かを吐きつづける。悲鳴や嘔吐はまだまだ現実的「反応」にとどまり、声なき悲鳴と吐瀉物なき嘔吐にとどいてはじめて拒絶は「思想」となるだろう。それにしても、なんという不快感か。

そんな生きいきとした不快を、立松和平とほぼ同時期に、小説にぶちまけていたのが中上健次であった。その後、多くの作家たちが登場したが、わたしにとって、ついに二人を超える作家はでてこなかった。立松の『遠雷』三部作と中上の『熊野集』は、「拒絶の思想」を惨憺たるゆたかさで実現した作品といつてよい。

しばらく離れていた立松和平の小説に再会したのは、『奇蹟 風聞・天草四郎』と『浅間』である。そこでは「荒れた光景」が歴史のかなたから、いっそう徹底された「亡滅の光景」として身をおこす。権力者のいい気な「坂の上の雲」的風景なんてどこにもない。

少し先に薄明の道にはいった立松和平の「荒れた光景」と「亡滅の光景」を、わたしはしばらくは語りつづけようと思っている。

「カウント9」

高橋伴明 映画監督

『バンメーさあ、オレもう一回“連赤”書くよ』この一言から映画“光の雨”は始まった。周知のとおり、盗用問題から連載中止というとてもないパンチを浴びてワッペイさんはマットに沈んだはずだった。あのカウントーパンチがどれだけの威力でワッペイさんの心と肉体を撃ち貫いたか、同じモノをつくる人間になら誰でもわかる。しかしワッペイさんはカウント9で立ち上がったのだ。物書きだけを痛い目に合わせておいていいのか、映画屋は黙って見るのか。俺もリングに上がらなきゃならない。未見の“連赤”をどんなことがあっても映画化するとワッペイさんに約束した。

これは反則技だろうが、許して欲しい、ワッペイさんはゲラの段階から原稿を渡してくれたのだった。それに添って映画に向けての構想を練ることができた。シナリオの直しについても彫大な自著に囲まれた恵比寿の仕事部屋で多くの助言をもらった。何よりも大きかったのは知床の地と人々に繋いでくれたことだった。ロケ地を提供してもらい、セットを作ってもらい、暖かい飯を食わせてもらい、もらい、もらい……。そして知床毘沙門堂の前に佇み撮影の無事を祈ってくれていたワッペイさんの姿が忘れられない。さらにはナレーション、宣伝活動まで担ってくれた。こうして想定内のパンチを浴びたもののKOされることなく映画は完成した。入口から出口までワッペイさんは俺みたいな後輩を導き、土台に徹してくれたのだった。感謝の言葉がみつからない。報謝の術はあるのだろうか。



平成三二年二月八日——俺は10カウントを聞いていない。ワッペイさんはカウント9の人だ。

「ワッペイさんさあ、頼んであった『浅間』の続き早く書いてよ。俺はあのラストから始まる物語を映画化したいんだよ」

○

俺のこと書くっていつていたのに

高橋公

認定NPO法人ふるさと回帰支援センター常務理事・事務局長

ワッペイちゃんに出会ったのは一九六九年四月一七日夕刻。暮れなずむ早稲田大学の本部前であった。二一歳。彼はサークル「文章表現研究会」の仲間たち数人と早大本部をバリケード封鎖した私たち早大反戦連合に食糧の差し入れに来た時であった（本人談）。周りは敵対するセクトが制圧しつつあり、決死の行動だったよね。

早いもので、もうすぐ四一年。同年の秋、阿佐ヶ谷の彦由常宏先輩のアパートで、彼に「小説を書いている立松だ」と紹介されて、知り合った。髪が長かったんじゃない。あの頃、ワッペイちゃん達はなんか気まじめな気分で、そう神主がお祓いをするような気分で毎夜、神社の境内で剣道の稽古を始めたよね。あれは一体何だったの。その後、ワッペイちゃんは一旦、東京を引き払い宇都宮に戻ったよね。引越しを手伝いに行ったら、その住んでいた家が傾いたような古い家で、蹴ったら倒れそうな家だった。あそこが駆け落ちした挙句の新居だったんだよね。その何年か後に、自治労の自治研

究集会で宇都宮に行った時、呼び出して死ぬほどウイスキーを飲んだよね。三人で二本半も空け、翌日仕事にならず、何やってんだと自治労書記長だったかに大目玉を食ったことを覚えています。その後、再び東京に戻ったときはもう売っていたよね。「遠雷」も映画になったしね。

今年になって、一月七日に農水省で赤松君(同時代一緒に早稲田で学んだ)に会って、「大臣室で学生運動の話ができるなんて時代が変わった」って喜んでいたらよね。

〈なんか文章を書いていると、いろんなことが思い出されて、涙が止まりません。〉

近年はいっしょにふるさと回帰運動に取り組んだよね。この運動もやつと形になり始め、喜んでいない。なんで死んじゃったんだよ。これからじゃないか。一度、忙しすぎると言ってたよね。女房に仕事を入れ過ぎて怒られるんだと言っていたよね。でも、断ると「もう仕事が来なくなるんじゃないかと思っちゃうんだ」なんて言ってたね。「ハムもなんだかんだと俺を呼び出すしさ」なんて言ってたね。ワッペイちゃん、もう呼び出そうだったって居ないんじゃないよ。去年、自叙伝みたいなやつ(全共闘編)を書いたら面白いって誉めてくれたじゃない。そのうち、俺のこと小説にするなんて言っていたけど、あの件、どうなったの。まだまだ仕事が残っていたのに、死んじゃ駄目だよ。

ワッペイちゃん、いろいろあったけど友情をありがとう。会えてよかったよ。さよなら！

ワッペイが 逝きし夜にも 梅香る



これからだのに ― 立松和平追悼

高良勉 詩人・批評家

何ということだ。昨年一〇月末に、東京で会い一緒に飲んだばかりの立松和平さんが逝去したという。「ユクシ(うそ)だろう。」二月八日、小樽の長屋のり子さんからの電話に言葉を失った。しかし、一〇日の新聞には訃報が掲載された。

二月は、残酷な月だ。私は、五日にアイヌ民族のかけがえない親友チカップ美恵子さんを亡くしたばかりである。まさか、あんな元気な和平さんが。私は、その晩先輩の川満信一、岡留安則ら諸氏と沖縄で「お通夜」をするしかなかった。窓の外は氷雨。アイエー、落ち込むばかり。

立松和平の作品は『遠雷』をはじめ愛読してきた。特に、『歓喜の市』には身震いするほど感動した。二歳年長の立松の存在を強く意識していた。彼が沖縄・波の上のバー街でアルバイトをしていた頃、私も同所で働いていた。与那国島で、サトウキビ刈りの援農活動をしていることも知っていた。

だが、直接会うのは意外と遅く、十年前頃に喜納昌吉の音楽事務所で初対面だった。その後、小説『道元』を恵贈していただき、お互いの著書の交換が始まった。私も、ようやく「ワッペさん」と呼べるようになっていた。

私たちは、一〇月三十一日に神田明神で開催された「山尾三省祭り」に参加した。鎌田東二と東京自由大学が主催したシンポジウムに、三省の妹・長屋のり子と三名でパネリストを務め語り合い、詩の朗読も行なった。その晩の打ち上げ会で、私はワッペさんに請われて「与那国シヨンガネー」を歌った。彼の好きなこの与那国民謡が、まさか今生の別れの歌となるとは。

一方、私たちは同人文芸誌『月光』を福島泰樹や黒古一夫たちと勉強社から再刊したばかりである。その二号「宮沢賢治詩集」のゲラもまだ届いていないのに。「大法輪」連載の小説「良寛」は、どうなるのだ。

三省や島尾敏雄の遺志を継いで、神田川の水を甦らせ、ヤポネシア群島の未来を構想するはずであった。全ては、これからだったのに。ちくしょー。ワッペさん、あなたの遺志も引継ぎ、語り伝えていきます。安らかに眠れますか。琉球弧からご冥福を祈ります。合掌。

○

——遠い軒先に帰りたい——立松和平氏の思い出

田崎亨 ワッカの会（立松和平を囲む会）

私の家での酒宴の折、あなたに戴いた色紙を今観ながら書いてます。

市役所の総務課で沼尾ちゃんに紹介されたのが、あなたとの出会いの始まりでした。それから三十三年間、家族ぐるみの付き合いが持続しました。

高校大学と同じ場所に生きてそれまで一度も話をしたこともありませんでした。出会って間もないころ、「亨ちゃん長く付き合おうよ」とボソット言ってくれたのが嬉しかったのを思い出します。同じ年なの仲人までして頂いて、それ以来あなたとワッカの会の連中には迷惑のかけつばなしでした。今思うとあなたからのプレゼントは万華鏡のようです。磨赤兒の舞踏。友川かずきの歌。外波山文



明の芝居。福島泰樹の絶叫短歌。トシ・ライブ・バンド。三上寛。山下洋輔のフリージャズ。梁島さんの絵。勿論あなたの文学の世界。それとあなたの出会ったすばらしい人たちがたくさん宇都宮に来てくれて、ライブで体験できました。夢のような体験でした。

生きる賑わいをこんなにあたえてくれた恩に報えず残念ですがあなたの教えの通りこの無常と闘わず受け入れるしかありません。帰郷のおり少しでも 遠い軒先の一部にワッカの会がなれていたら幸いです。また会いましょう。実につらく苦しいけれど耐えるしかありません。

○

湯けむり中継譚

田代芳寛・眞知子

塩原温泉和泉屋旅館主人

二〇〇一年一月二八日、NHKBSの人気番組「おい、ニッポン 今日とはとことん栃木県」が朝から晩まで各地から生中継で栃木を紹介することになった。立松先生のご推挙があつて塩原福渡にある和泉屋からも「文豪が愛した温泉旅館」として中継が入ることになった。

和泉屋は太平洋戦争前後を通して、長谷川伸先生を中心に大衆文芸の作家たちが結成した「新鷹会」という勉強会が開催されたことで知られていた。山岡荘八先生の「徳川家康」や富田常雄先生の「姿三四郎」も和泉屋で執筆されている。そんな背景も好まれた立松先生は時折、「ひとつ風呂浴びて」原稿をものされた。昔のままの造作と窓下を流れる箒川の清流と瀬音が気に入られ、主の求めに応じて『箒川青き流れを夢に聴く』と色紙に残して下さっている。

さて、雪深い正月の塩原、それも夕間暮れに山岡莊八先生が「家康」を書いた「りんどうの間」から中継担当の村上真吾アナがスタジオにいる立松先生に語りかける。「立松さんもこちらへはよくお見えになるそうですね。あれ、このテーブルに見たことのある字の原稿があるぞ。」村上アナがおどけた調子で和泉屋が頂戴していた立松先生の原稿を栃木弁、いや立松弁で「尻上がり」を誇張して読み上げる。「文字は訛っていないはずんだけどなあ」と先生も応酬する。たった一分の中継ではあったが、立松先生のほのぼのした語りを軸に塩原を楽しんだ文豪たちの昔と今が交錯してよい放送になった。

私たち夫婦の語らいに登場する、今は思い出となってしまった立松弁は、今夜も降り始めた雪にあたたかくよみがえる。和泉屋「りんどうの間」は立松和平先生執筆の間と記念された。

○

無題

田中知二 集英社第五編集部次長

屹立する巨大なモアイ像を見上げながら、

「旅から旅の人生を知らず知らず送っているうちに、

とうとう、こんな所にまで来てしまったね」

立松さんはポツリといった。二十年前、イースター島。

僕は立松さんの旅のひとコマに立ち合った。



「僕のおじいさんは、目が悪かったんだ。なんで、僕がこんなに旅をしているのか？」

何も見えなかったおじいさんが、僕にいろいろなものを、見て来いよ、っていつてる気がするんだよ」

おじいさんの目の代わりになった立松さんは、

私たちの代わりにもなって、沖縄、知床、アラスカ…。

あらゆるものを見て、そして、語ってくれた。

美しいもの、醜いもの、賛嘆すべきもの、唾棄すべきもの。

その奥にある。かけがえのない真実。

立松さんは見て、そして、語った。

そして、立松さんは、永劫の旅人になってしまった。

旅人は帰らずというけれど、

立松さんの本を開くとき、いつもの声で、

旅の話聞かせてくれる。

立松さんは、今日も旅の途中なのだ。

○

詩人の魂

——悼・立松和平

田村雅之

詩人・株式会社砂子屋書房社主

高崎駅の前で携帯メールが入った。「タテマツさんが死んだね、残念だね」。娘からだった。突然で、愕き声を失った。なぜだ、と思った。

立松和平にはじめて会ったのは、何時だったろう。

一九七〇年代の半ばに、わたしは『磁場』という季刊の文芸雑誌を創刊した。一九七七年の奥付をもつ『磁場』一三号の目次の巻頭に、小説「泥酔」立松和平とある。つまり、この号の目玉はこの小説であるという編集者の意気か示されているのだ。四三枚の短編小説だ。この年の夏頃に、小説を書いてほしいと依頼をしていたことになる。

四十数枚の、コクヨに書かれた生原稿を、神田駅の「エリゼ」で手渡された。

それから終刊の二十号まで、八回の連載が続く。宇都宮から上京するたびに会った。新宿のゴールデン街のナベさんが、立松の目を見て、「いい眼をしている、必ず売れる！」と励ました。しかし実は、もう既にじゅうぶん立松は売れっ子だった。「書いても書いても注文が来る、すこし休みたい」とボヤクのを何度も耳にしたものだった。

『途方にくれて』の出版記念会では、宇都宮まで出かけ、例によって朝方近くまで飲みつづけたあと、翌朝シェークスピア全集などが並ぶ自宅書斎まであがりこんでいた。

国文社時代『今も時だ』、砂子屋書房では『魂の走り屋』、その二冊の出版編集をした。印税を分割して支払うと、「そんなことしなくていいんだ、いまはオレ結構金持ってるんだ」といつもの栃木弁で



返してくる。あの優しさが今でも忘れられない。

当時から、立松の文章を読むと、ああこの作家には詩人の魂があると思っていた。詩を書いていたわたしは、詩の理解できる作家として、中上健次とともに立松和平を、二歳年下だけれど一目も二目も上に置いていたのだった。

○

大きな可能性の終焉

辻井喬 詩人・作家

立松和平は懐かしい人である。

彼には、いっどんなに忙しい時でも、会っている相手の希望を聞き、できることなら役に立ってやろうという気持があった。それだけに相談しやすい感じを多くの人が持ったから、作家という仕事以外にもずいぶんと忙しかったのではないかと思う。

私も、中国から、「文学の世界で中枢にいる作家を三カ月ぐらい招き、中国のいろいろなところを見せ、理解を深めてもらいたい」という要請が来た時がそうだった。

しかも中国流で、「二カ月後ぐらいから」というあわただしさだ。私は当惑したが、ふと「文化大革命」以後の中国文学がどう変わりつつあるのかについて彼と話し合ったことを思い出した。これは一面、政治と文学の問題でもあり、十年にわたる文化大革命の時期に下放されて、辺境地区で辛い生活をした作家たちが、その後その経験をどんな具合に作品に反映させているかも、その雑談の中での私

たち共通の関心事であったので、さっそく連絡をした。

たしか、彼の住まいから比較的近いホテルのロビーだったと思うが、翌日そこに現れた彼は、急な話なので困った様子だったが、「二カ月遅らしてくればなんとかなる」と言ってくれた。

話が終わってから、三カ月の中国体験は広い社会的視野を持つ彼の文学にとつても、きつといい影響を持つに違いないと私は考え、それもあわせて「良かった」と思ったのだった。しかしそうした期待が実現する前に、彼は突然逝ってしまった。

あと十年、彼が元気に活動が続けていれば、日本文学はより多くの果実を彼から得ることができたらうと私は思う。そんな意味も含めて、彼の急逝はかえすがえすも残念でたまらない。

○

「新人作家」の仲間として

津島佑子 作家

立松さんは生まれ年でいえば私と同年だったし、また学生のころから、「早稲田文学」で活躍している作家だということで、その存在に親しみを感じつづけてはいたものの、よく考えてみれば、ゆつくりとお会いする機会がないままなのだった。

一応、「新人作家」の仲間として、中上健次さんや高橋三千綱さんなどとお会いすることが増えてからも、立松さんの話はよく出てきて、それはいつも、あいつはこれからどうするんだろう、という心配ばかりだったという気がする。私もそこから立松さんの事情を聞き知り、間接的ながら、彼を応



援する気持になっていた。せっかく「早稲田文学」で華々しくデビューしたのに、生活がままならず、なかなか落ち着くことができない様子だった。

それでもある時期から、彼は猛然と書きはじめ、今度は、立松さん、ちょっと書きすぎなんじゃないの、もっとゆっくり書けばいいのに、と言いたくなるほどだった。

たくさん書いて書いて、いろいろなことをめまぐるしく手がけ、あちこちに出かけ、そんな立松さんだったから、結局、ゆっくり会う暇なんかなかった、私としてはそうばやきたくなる。

最後にお会いしたのは、『毒——風聞・田中正造』で毎日出版文化賞を受賞なさった際のパーティー会場だった。奥さまも一緒に、私はまるで旧知の仲のような顔をして、立ち話を気楽にさせていたのだったが、そんな気楽さをもしだしていたのは、じつは立松さんのお人柄だったんだ、と今になって思い当たる。

互いに若かったころ、あんなに立松さんの身をみなが案じていたのも、立松さんの人柄があつてこそ、だったのだろう。あいつさあ、なにやってんだろうな、という当時の、みんなの声がなつかしい。ひとりひとりと欠けていき、今度は立松さんまでが突然いなくなつて、とてもさびしい。

○

立松和平さんを偲んで

鶴田卓彦

日本経済新聞社元社長

立松さんとの交遊はおよそ十年余り。法隆寺の大野玄妙管長に誘われて北海道は知床の毘沙門堂、



太子堂、観音堂の三堂例祭に参加したのが最初の出合いだった。それ以来、毎年六月末の二日間にあたる三堂例祭での高僧の読経、法話を拝聴、そして前夜祭、後夜祭をはじめ数次に及ぶ宴席を共に過ごして親交を深めた。

今年も、この例祭が近づいてきた、と楽しみにしていた矢先の訃報。三堂例祭は立松さんと地元で自動車販売業を営む佐野博さんの二人の情熱がつくり上げたもので、欠けてはならない人が消えてしまった。痛恨の極みである。

立松さんは文壇では行動派作家と呼ばれる。地球上の有形無形のあらゆる現象に興味を持ち、学生運動、土木作業員、地方公務員から世界平和、五穀豊穡、商売繁盛、家内安全、身体健全を祈る読経まで貪欲に幅広く経験、行動したら直ちに活字にする。

知床三堂例祭が一般の宗教行事と際立って異なる点がある。それは京都仏教界の重鎮である相国寺住職の有馬頼底猥下、奈良・法隆寺の大野玄妙猥下をはじめ宗派の異なる多くの仏教界の高僧が一同に会し、狭いお堂の中で肩を触れ合いながら読経する光景である。立松・佐野の両青年がいなかったら、このような天下唯一の宗教行事は実現しなかったに違いない。

このようなアグレッシブな立松さんだが、行事の仕切りや宴会などでは露出性はゼロ。飄々として高僧にも一般の参加者にも相手の目線で対応する。どちらかと言えば寡黙で北関東人らしく言語不明瞭なところもある。

そんなところが無性に人懐っこさを感じさせる男だ。立松さんが遺してくれた知床三堂例祭を悠久の道へと繋げて行くことを誓いつつ合掌。



「中井くん、仕事どう、だいじょぶかい」

中井健人 出版・企画ウエイツ代表

一九七〇年代初め、私が早稲田に入ったころは、学生運動も下火になり、投げやりで、しかしどこか燦々するような、いしだあゆみが「砂漠のような東京で…」、北原ミレイが「懺悔の値打ちもない」と歌ったような時代だった。そんなときに出遭ったのが『途方にくれて』『自転車』『今も時だ』だった。当時の流行作家中上健次の『十九歳の地図』『鳩どもの家』や、時代の違う『遅れてきた青年』『僕らの時代』の大江健三郎よりも、どこか近しかった。自分ではうまく言葉にできない鬱勃とした感情を、的確に表現してくれる作家がいることがうれしかった。

ご本人に会ったのは、同じ大学の先輩の高橋公さんの紹介だった。会うたびに、不遜にも思ったものだ。「この人が生きているのなら、僕だってまだやっていける」と。それを見透かすように、ワッペイさんは会うたびに「中井くん、仕事どう、だいじょぶかい」と言っ、気にかけてくれた。仕事よりもむしろ、私自身に気を遣っていたのかもしれない。

一度だけ取材に同行したことがある。長野県小布施のセーラ・マリ・カミングさんをインタビューしたときだ。行きの新幹線では「どこでも書ける習慣をつけてるんだよ。書く時間が欲しいんだよね」と言っ、原稿用紙に向かい始めた。話をしようと思っ、いたけど、邪魔をするわけにはいかない。でも、万年筆を進めながら、ポツリポツリと話しかけてきた。「いいですよ、原稿に専念してもらっ、と言っ、」「そうもいかないだろ」と、それでもペンは動いていた。

小布施では、先にワッペイさんには帰ってもらっ、たのだが、取材を終えて小布施駅に戻ると、ワッ

ペイさんが待合室で原稿用紙を広げていた。遠慮してその場を離れようとしたら、見つかった。また原稿を妨げてしまったと思い、「お土産を買ってきますから」と言って離れようとしたら、「そこにあるよ」と、目の前の棚を指差されてしまった。こちらの気遣いを通じなかった。いや、ワッペイさんは気に留めてくれていたのだろう。

帰りの新幹線では、さすがに席を離れた。トイレに行くときにふと席を見ると、ワッペイさんは静かに眠っていた。万年筆が指にきちんと握られていた。夢の中でも書いていたのだ。

○

和平への手紙 篠井にて

沼尾博行 ワッカの会

久しぶりに手紙を書く。今年は暖冬のせいか宇都宮の梅も例年より二週間ほど早く、まもなく満開だ。その陽気に誘われ、お前が今年も来ると言っていた篠井の梅林に来てみた。口悪い連中がこの寒さを比喻し「宇都宮のチベット」というだけあり、開花はほんの数輪だけだった。

気を取り直して辺りを歩く。すると、梅林の下にはセリが、まだか細いがしっかりと根を張っていた。俺たちが毎年楽しみにしている五月の山菜パーティーに合わせ、旨さを貯めているようだった。

そうそう、今年のパーティーは、セリの外に、コシアブラ、山ウド、タケノコ、たんぼぼ、もち草などのてんぷらはもちろんだが、もうひとつメニューが増えるぞ。それは、俺のうつ蕎麦だ。香り、のど越しともプロと遜色ないなんて、うぬぼれている。楽しみにしててくれ。



そういえば、お前が最初に御馳走してくれた料理を覚えているか。ずいぶん前の話だ。「インドネシア料理をごちそうするから遊びに来い」の一言に、俺は心をときめかせ、思い切って一級酒を買ってお前を訪ねた。そこで、出されたのは、ただタワシで洗っただけのサツマイモの輪切りだった。これには参った。しかし、何年か前、お前が得意そうに作った「チャンチャン焼き」は旨かった。今は全てが、いい思い出だ。

それにしても、お前ほど世界を歩き、自分の目で、自分の尺度で事象を捉え、その一つひとつを文学で問うた男はいないのではないか。本も、三百冊も書いているという。そろそろ、ゆつくりしようや。幸せなことに、篠井は余りにも田舎で、お前が「遠雷」で危惧したような都市化の波は、当分来そうにもない。そして、相変わらず田んぼに映る月が美しい。ただ、ワッペイという、温かくてでっかい灯りだけが足りない。合掌。

○

「川ガキ養成講座」誕生秘話

野田知佐

カヌーイスト・作家

以前、立松と鹿児島県の錦江湾にカヌーを漕ぎ出し、桜島の前で釣りをしてタイを二十匹ほど釣ったことがある。その時、彼が「日本の絶滅危惧種に川ガキがある」といい、その言葉がぼくの頭の中に残っていた。ぼくも立松も子供の頃、川に潜って魚を捕った楽しい共通体験がある。

彼の言葉にヒントを得て、その後、徳島・吉野川で「川の学校・川ガキ養成講座」ができた。忙し

いスケジュールをやりくりして、立松が「川の学校」に何度か講師としてきてくれた。何が面白いのか、彼が歩くと、子供達が後ろからぞろぞろとついていく光景をまだ覚えている。

ある所で子供と川に入り、上がってきた立松がいった。

「いやあ、いいね。こんなことをすると、子供はみんな川が好きになるなあ」

あれから九年が経ち、「川の学校」は二七〇人の卒業生を送り出した。一番年長の川ガキは社会人になっている。みんな川に潜り、魚を追いかけて、ヤスで突くことを最上の川遊びと考えている連中だ。ダムができる川が濁り、水温が下がり、魚がいなくなるということを肌で知っているので、全員猛烈なダム反対の川人間である。

和平^{わっぺい}さんよ、君の一言から生まれた「川ガキ養成講座」は、毎年、多くの野生児を生み出している。みんなが立松和平のことを忘れない。

○

無題

野村宗次郎

オカリナ奏者

立松さんに初めてお会いしたのは一九八六年の秋だったと思います。「立松和平・心と感動の旅」が始まり、そのコーナーのオープニング曲として、大黄河のテーマ曲を使ってくださいました。それが縁で「心と感動の旅」のテーマ曲も作って下さいという事になりました。それでレコーディングスタジオにスタッフの皆様と一緒に訪ねて来て下さいました。「心と感動の旅」で語られる立松さん



のひと言ひと言が、正にその通り!!と言いたくなる位、僕たちの言いたい事を代弁してくれている。そんな気持ちでいつも見させて頂いておりました。

僕の方は音楽だけで表現しているわけですが、やはり言葉で伝える事もとても大切です。自分には旨く言えないけれど、そこに立松さんの身体から滲み出てくるひと言。やさしくてわかりやすい言葉、けれども重たいひと言。日本の海や山や川、そして世界中を旅して、色々な人たちと会って話して来た事すべてが腐葉土の森から湧き出て来る一滴の水のように純度の高い、慈愛に満ちたひと言です。

立松さんが一度だけ僕のCDのライナーノーツを書いて下さいました。栃木県茂木町^{もてぎ}の山里でオカリナを作っている頃から知っていて下さった事も含めて、さらにこんな風にも書いて頂きました。『オカリナは震える様な繊細さで温い音をだす。土を焼いてつくったから素朴な楽器だというのは間違っている。目のつんだ緻密な音は、素朴からはおよそ遠い高度なテクニクによって編りなされている。』嬉しかった。立松さんは解って下さっている。それだけで充分、心強かった。

それから二四年。本当にいろいろたくさんありがとうございました。これからは少しずつでも、ご恩返しをして行きたいと思っていたのに……。悲しいです。残念です。

でも又いつか来世で生まれ変わるとしたら同じ時代にと願っております。

○

合掌

ありがとうございました

林京子 作家

立松和平さんにお逢いしたことはないが、テレビのルポルタージュなどで、よく知っていた。山頭火の托鉢のあとを辿ったルポのときだったか。急な山の稜線に立って、母校の先輩でもある出家僧への思いを語る目は優しく、しかし何かをみつめている。口調も穏やかだが、うねる語尾は深く長く引かれて、山間に沈んでいく。静かさと咏嘆の思いが入れ交ざって悲しく、この作家はどんな人なのだろう、と私はひかれた。変な人だ、とも思った。

私の全集が出版されたとき、立松さんは推薦の言葉を書いてくださっている。黒古一夫さんが頼んでくださったのである。

「命を見つめて」と題して、――過去はあまりに重いのだが、文学の力を使いそこから現在へと自由に行き来することによって、核状況下の現代は人間の命をあまりに粗末にしていることがわかる。そのことを静かに、時には激しく、語りつづけることこそが、原爆や戦争から生き残ったもののつとめではないのか。――

この言葉は作家としての、彼の姿勢なのだろう。しかし、何かをみつめる彼の目は、何を探し、何を求めているのか。立松さんの親友である黒古さんに、私は電話をかけて、どんな人なのか、と聞いてみた。中国で現地召集された父上がシベリアに抑留されたこと、その復員後に彼は生を受けたこと、戦後生まれた自分は、その死者たちの命に支えられ今を生きていること、それらのことを忘れず、是非書きたい、と彼は話していたという。心のこりだったと思います、と黒古さんは話し、友人としてこ



れからも彼の作品と生涯に僕はかかわっていくと思う、といった。

友として、同じ文学の仲間として在る二人が、私は羨しかった。でも、変な人ですね、と私はいった。黒古さんは、ウワッハッハッハ、と腹の底から笑い、男体山の吹きおろしをともに受けて育つた男ですからね、といった。逝った友を薦く語ってくれる人がある――。和平^{ワッペイ}さんは幸せである。

○

貧乏でも心から愉快だったあの頃

彦由真希

映像プロデューサー、オフィスボウ代表

有馬邸の広い玄関に居心地悪そうに佇んでいたワッペイちゃんの記憶が鮮やかです。それがあなたとの長いお付き合いの始まりでした。お互い、まだ二十歳になるかならない頃でしたね。

当時、私は早稲田で授業にも出ず芝居をしていました。アルバイトに作家有馬頼義氏の早稲田文学担当の秘書をやっていたのです。

「マキ、この小説をどう思う」と渡されたのが、有馬さんが選考委員長をしていた小説現代新人賞に応募してきたワッペイちゃん原稿でした。「入選は無理かもしれない。でも、いいものがある」と有馬さんは言い、家と呼んだのです。

汚いなりでした。でも、土間から見上げた瞳が輝いていました。話すうち、共に暮らしていた彦由常宏と会ってもらおうと思ったのです。全共闘の政経学部副委員長彦由のことをワッペイちゃんは知っていました。出会いの場は下北沢の喫茶店でした。

みんな貧乏でした。でも愉快でしたね。阿佐ヶ谷の私たちのアパートにはいつも大勢の人が集まっています。須賀神社での剣道の稽古。磨さんとのレコード『ダンシング古事記』の制作。美千繪さんをとまなつて我が六畳間にきたときのこと覚えていますよ。やがて、仲間の一人が出て行ったアパートに二人は入居しました。ちょうど、我が家と磨さんのアパート、ワッペイちゃんの新居は杉並区成田東で三角形を作りました。出勤する美千繪さんが心を込めて作り置いたカレーを食べてしまった、私もその一人です。私はといえば芝居も有馬さんの秘書もやめ、生活費稼ぎに磨さんの奥さんと知り合ったゴールデン街の「モッサン」に勤めていました。

そんな混沌からみんなそれぞれの道を闊って歩んで、あつという間の四十有余年。最初が彦由でした。松永さん、小坂修平さん、そしてワッペイちゃん。この世に決着がついたら、私も愉快的仲間に加えてください。あなたとの最後の約束「高橋ハムとは仲良くしてね」は守っていますよ。では、ほんとうにさようなら。

○

立松和平様色々有り難うございました

日野西光尊 中宮寺門跡

立松和平様、貴方はどうしてそんなに早く黄泉に旅立たれてしまわれたのですか？ 私はある理事会の席上、お友達の携帯電話にお知らせがあり、秘かに伺ったのですが、とても信じられず、又身震いがしてしまいました。



昨年の夏、知床三堂の例大祭でお元気なお姿でお親しくお目にかかり、例大祭の主催者として、何くれとなく皆様のお世話を頂き、また知床聖徳太子殿では、よろけそうになりました私を支えても下さいました。

そのお忙しい中にも、昨年は御奥様と、お可愛いお孫様とご一緒のお嬢様の桃子様もご一緒に、私たちも温かく和ませて頂きました。そのお元気でいらっしやいましたお姿が今も、ありありと目に浮かんで参ります。

初めてお目にかかりましたのは、もう随分前の事です、私共の初釜のお茶会の席に、法隆寺当時の高田良信管長猥下と共に、法隆寺修正会のご修行の後に、お出で頂きました。

その後には法隆寺様のお誘いで、中国のシルクロードの旅などもご一緒させて頂きましたが、何時も気さくで、温かく、思いやりのおありの方で、グループの中にいらっしやるだけでとても和やかな雰囲気になり、楽しく嬉しかったことを、今も実感として思い出すのでございます。

伺いますと、今年の修正会のご修行にも、法隆寺におみえになったとか？ ご無理ではなかったのでしょうか。もつともつとお元気でいらっして頂きとうございました。そして朴訥な節まわしでの朗読が伺いとうございます。

そういえば私の喜寿の「歌集出版記念会」の折にも態々京都までお出まし頂きまして、お祝いの詩を朗読して頂きました事、本当に有難く、嬉しく、生涯の思い出の宝物でございます。もう一度だけでもお目にかかりまして、心からのお礼が申し上げとうございました……本当に淋しく、悲しゅうございます。

無題

○

広河隆一

DAYS JAPAN 編集長・フォトジャーナリスト

立松さんとはじめて会ったのは、彼がレポーターのテレビ番組の取材で、私がコーディネーターとして内戦中のレバノンを案内した一九八四年のことでした。戦闘が続き、ずいぶん危険な取材でした。迫撃砲弾の直撃から危機一髪で助かったり、米軍の戦艦に攻撃された村に行ったりしました。右派の砲撃下の山岳地帯で、彼が敵の照準に入る場所に身を乗り出したので、私が彼に危険を知らせる前にカメラを向けたという話や、また爆撃下の建物で、私がさっさと安全な柱の陰に寝場所を確保したという話も彼から何度も聞かされました。しかし彼は私のことをなんてひどい奴だとは言わずに、フォトジャーナリストはそうでなきゃ、と言って私を戸惑わせました。

しばらく後に私が月刊誌DAYS JAPANを創刊するとき、彼はずいぶん応援してくれました。昨年は、今年秋に予定されているペンクラブの世界大会で、平和委員会代表の彼が私の写真展を企画して、いっしょに会場を見て回りました。そして昨年十一月末に早稲田大学でイベントをしたときに講演をしてもらった後、「じゃ、これから君の写真を見てくるから」と言って写真展会場のほうに消えて行ったのが、彼との最後になりました。「見たよ」と言って、どこからかひよいと現れるような気が、今でもしています。



立松和平よ、さらば 業苦を生きた旅終わらない

福島泰樹 歌人・法昌寺住職

初めて会ったのは、一九七〇年三月。立松は早大政経学部で、有馬頼義ひきいる「早稲田文学」に小説を書き捲っていた。六〇年代後半の激しい政治的嵐の中で、怒りを内向させたまま立ち竦む青年を描いた『とほうにくれて』が、デビュー作である。私はといえば処女歌集『バリケード・一九六六年二月』を刊行したばかりの修行僧だった。

大手出版社への就職を蹴り、憤然として小説家への道を選んだ君は、飢えに苦しみながら東京・板橋の下宿の机に灯をともし続けた。早稲田文学新人賞作『自転車』『今も時だ』は、一人称「ぼく」で書かれた全共闘文学の記念碑である。ほどなく小山内美千繪さんと結婚。インド、東南アジア、彼女を置き去りにしての青春放浪は続いた。

だが、転機の時が来た。故郷宇都宮で市役所に勤務しながらの作家生活が始まったのである。冷えてゆく時代の中にあって君は書き続けた。小説集『光匂い満ちてよ』（一九七九年）は、痛みに満ちた青春の総括の書である。時代の変革を求めて戦った若者たち。しかし退潮の後、彼らを待っていたのは「内ゲバ」の悲惨であった。作家は立ち去ろうとはせずに、自問し続けるのだ。殺していたのは、自分であるかもしれないではないか。

都市化してゆく農村にあって、トマト栽培を続ける『遠雷』（八〇年）の主人公満夫は、兄弟篇の『春雷』（八三年）で先祖の土地を迫われ、三部作『性的黙示録』（八五年）に至り殺人を犯してしまう。殺

す側と殺される側とが分かちもつ奇妙な共犯性は、ドストエフスキー『悪霊』を、思い出させた。

時代の闇を自己の責務のように纏い続ける作家の闘いは平成、一九九〇年代に至っても変わることがなかった。同時代の人々が足早に立ち去り、葬り去った七二年の連合赤軍粛清浅間山荘事件を、正面に見据えて書き始めたのである。しかし雑誌連載中の「光の雨」は、盗用問題を生み、メディアを沸かせた国民的人気作家は、一夕にして世間の苛烈な指弾に曝されることになるのだ。謝るな立松、と私は叫んだ。連赤幹部の総括の著作という歴史的資料で、事実に迫ろうとしたのではなかったか。

この間作家は、真摯に苦悩した。苦悩は光明をもたらした。仏陀との出会いである。やがてそれは泉鏡花賞を受賞した大作『道元禅師』（二〇〇七年）上下二巻となつて結実してゆく。さらに刮目すべきは、『光の雨』（一九九八年）を書き上げたことである。

私の話を遮り、目を見据え、「だけどよう、福島……」が君の口癖だった。いつの間にか君は、兄貴の役割を演じてくれていたのだ。

「勉強出版から俺、小説集だそうと思うんだ」。相談を受けた私は、なにを急いでいるんだ、と思った。『立松和平全小説』全三十巻の刊行が始まった。快哉を叫ぶも束の間、三百冊もの単行本を書き上げた作家は、足早に去っていった。君との責任編集誌「文藝月光」三号は全共闘を、四号は満州を、そして君の僚友中上健次を特集するはずではなかったか。優しい眼差しで時代の業苦を生き、人間の心の闇と光を書き続けた作家立松和平の旅は終わらない。

（読売新聞 二月一日掲載）



旅の思索者 和平兄へ

藤井吉朗 山奥大学主宰

二〇〇六年八月五日、山口県周防大島、沖家室島の開島四百年の講演に、盟友である高橋公氏と来られた時、お会いしたのが初めてでした。その地は二人が慕っている、彦由常宏氏の生誕の地であり、又その翌日は、公兄の協力で岩国市で私が指導している堀江三兄弟（彼らは彦由氏の妹、海老崎恭子さんの教え子達）と連合山口の共催で二人に講演してもらいましたね。

和平兄は、四百年伐らない森業、私は宝の山として、毎月収穫できる林産物の山業、「山材力コンクール」で表彰された時は、嬉しかった。（個の志が明瞭に表われている）

また、公兄と二〇〇七年に起ち上げた早大「都市と農材関係論」ゼミがこの地で三十数名の学生達、知の放浪の場と時間、「山奥大学」となりました。二人のお蔭です。

来訪する若者達に、立松和平氏は、柳田国男、宮本常一が、見落し、見逃し、私達「ムラ社会で育った世代」が見棄てた、地方社会地域共同体を、全共闘運動の経験を通して、旅の思索者として、丹念に落葉を拾うように、「あるく、みる、きく、話す、書く」のスタイルは、私にとって、まるで河野水軍の荒々しい血を受け、出家、諸国修行の旅に出た「一遍上人」の姿に写しているように見える、と話していたのです。

昨秋「ふるさと回帰フェア」in 早稲田でお目にかかった時、過去二十年毎の遷宮（伊勢神宮）に於ける社会構造、経済状態を、お互い認識し合っていて、二〇一三年の遷宮に向けて、この国の、「あり方」「形」を、和平兄は「風の人」私は「地の人」の立場で、語らうことになっていたのが、心残りです。

命あり 今年の桜身に染みて

○

藤田和芳

大地を守る会会長

立松和平の死が伝えられたとき、私は一瞬茫然としてしまった。すぐには彼の死が受け容れられない気持ちだった。

四半世紀以上も親しくお付き合いさせてもらった。とくに農業と環境の分野ではいろんな仕事を一緒にやらせてもらった。一九八七年、全国農協中央会主催の「いのちの祭り」ではともに実行委員を務めた。東京の国技館に一人ももの農民を集め、これからは消費者の支持が得られる農業に変わって行かなければならないと訴えた。農協の全国大会で有機農業のことが語られたのは、あのときが初めてではなかったろうか。

彼は日本の第一次産業が廃れていくのを誰よりも嘆いていた。目線はいつも田や畑で汗して働く農民や、船に乗る漁師たちに向けられていた。あるとき彼が「減反」について語ったことがある。農民は土を耕し、種を植え、我が子を育てるように作物を育て、収穫の喜びを味わうことで自己実現する。「米を作るな」という政策はあまりにも悲しい政策だ。どんなに農民たちの心を傷つけ誇りを奪っていることか。アジアに旅したとき、日本の「減反」政策をいくら説明しても現地の人に理解してもらえなかった。「減反は止めた方がいいよ」と。彼はいつも農民の気持ちになって考えられる男だった。

彼とは春と秋の二回、俳句の会をやる俳句仲間でもあった。二〇〇四年四月に群馬県の温泉宿で開いた句会では、彼は「命あり 今年の桜身に染みて」という句を詠んだ。実は、彼は直前に心臓の弁



の手術をしたばかりだった。大手術で、万一の覚悟もしていたのだろう。でも無事に生きて帰ってこられ、こうして句会にも出席している。生きていることが身に染みる、と詠んだのだった。

今回も、無事の生還を願っていたが叶わなかった。再び帰ることのない友を送るのは辛いことである。長生きするということは、大事な友を次々と失う過程のことをいうのかもしれない。合掌。

○

肯定する作家

前田速夫「新潮」前編集長

その日、立松和平氏が入院先で亡くなったと知らされて、頭のなかが真っ白になった。あの、元氣のかたまりのようなワッペイさん（と呼ばせてもらう）が入院していたこと自体、信じられなかったが、理不尽な死を前に彼がどのような思いでいたろうかと考えると、たまらない気がした。

ワッペイさんとは、ほぼ同世代ということもあって、デヴュー当時から付き合っていた。大学紛争のひとつまを鮮やかに捉えた『今が時だ！』から、私が「新潮」を引く最後の号に掲載した『浅間』まで、途中、出版部在籍時には、『光句い満ちてよ』『太陽の王』『熱帯雨林』刊行の担当もした。

知り合った当時、彼は築地のヤッチャ場でアルバイトをしていたが、上京したての頃、食堂のメニューのオニオン・スライスを、オニオンズ・ライス、つまり玉葱ごはんと勘違いして注文したことがあったと聞かされ、大笑いしたことをよく覚えている（朝日新聞の「天声人語」が、そのことを書いていた。ワッペイさんオハコの冗句の一つだったろう）。

いまと違って、無名の新人が文芸雑誌に登場するのは、きわめて困難な時代だった。それだけ、既存の作家の層が厚かったということなのだが、社を訪ねてきた若者にむかつて、先輩の編集者が預かった原稿も読まずに、「有名になったら、そのときおいでなさい」と門前払いするのを見て、よしそれならと私は意地になった。

中上健次、北方謙三、車谷長吉、そしてワッペイさんが、私がひそかに四天王と名づけた新世代の作家だった。「第三の新人」や「内向の世代」がグループを形成していたのに対して、みな一匹狼。編集会議を通すに値する原稿を書いてもらうのに、どれだけ没、没の山を築いたことか。大半は耐えきれずに落伍したが、最後まで残ったのがこの四人である。

立松和平氏を、私はわが国では珍しい「肯定する作家」と見ている。その向日性（晩年、太陽から月へ変化した）、境界を突破する行動力は、曇りのない善意に支えられている。善意などというと、人は馬鹿にしただけれど、彼および彼の文学を知る人なら、その魅力に抗しえないはずだ。早すぎる死は惜しまれるが、ワッペイさん、あなたは十分完全燃焼した！

○

「わっぺえっ！」

磨赤兒

舞踏家・俳優

七〇年頃、事の次第があつて全共闘の一方の旗頭、彦由常宏との出合があつた。彦由を慕う男達が数十人、彼の住居があつた阿佐ヶ谷に集まり始めた。私も近所に住んでいたのだが、男達はいずれも



機動隊との攻防に明け暮れた手負いの戦士達だ。彦由は何故か私を何かにつけ兄貴分として扱った。それゆえ男達も何者か解らない私を大いに奉ってくれた。私も調子に乗り、彼等の戦術を見切って一人一殺を説いたりしていた。その男達のなかに立松和平がいた。おそらく私を一番奇異な目で観察していたようだ。ある日真剣だが何を見ているかわからない丸いキョトンとした目で、女性と駆け落ちしてきたという。私は大いに笑った。言うことが前近代を背負ったようであつたし、その行為をすでに文学として語っているように見えたからだ。つまり彼には自身の一挙手一投足が文学の一語々々だったのだと私は合点したのだ。何時頃からそうなったのかは知らないが、駆け落ちの時のただ一つの持ち物のトランクにはビッシリと原稿だけが詰まっていたとその可憐で美しい女性から聞いた私は益々彼がいとおしくなった。彼もまた半信半疑ながら二年ほど私の理解不能な行動（闇米屋・レコード制作）を共にしてくれた。が突然インドに旅立ってしまった。あの美人の彼女を放っておいてだ。しかも彼女の胎内には彼の子供が宿っているという。やることがまるで戦時中だ。これは笑えなかった。彼の心中はまさに戦時中だったのであろう。長い旅の末帰っては来たが、心底心配した。完全にあのインド病に侵されていた。日本の間尺の寸法がまるで破壊された夢遊病の態だ。私はかろうじて手はあげなかったが悪態をついた。が数年後あるべくして巨人になって復活した。爾来数十年、何かにつけて「わっぺい！」と言つては甘えるようになった。そして甘えられる男がまたいなくなった。

無常だ。

だがまた会えるさ！

同時代を生きるということ

○

三田誠広 作家

立松和平の名を最初に見たのは『早稲田文学』の誌上だったと思う。世代論をテーマとした座談会に、若手の代表として高橋三千綱とともに出席していた。群像新人賞の高橋の名は知っていたが、立松の名は知らなかった。わたしは業界誌の編集者をしてたが、そろそろ作家としてデビューしようと考えていた。それで同世代の書き手として立松の名を記憶した。すぐにわたしは作家としてデビューして、やがて立松や高橋とともに『早稲田文学』の編集委員になった。いまから三十年前くらいのことだ。

わたしと立松とは、性格や気質がまったく違うのに、小説のテーマはなぜか似ていた。はじめは学生運動などを背景として、いかに生きるべきかに悩む若者を描いていた。気がつくと、立松もわたしも、仏教に深入りしていた。なぜそうなのか深く考えたこともないし、立松と会ってもそのことを話題にすることはなかった。ただお互いに、よくがんばっている、といったコンセンサスがあったように思う。

空気を吸い、水を飲むように、小説を書く。立松はそういう書き手だった。わたしも同じだ。だから十年後も、二十年後も、がんばって小説を書いているだろうと思っていた。立松の死を知らされた時は、不意打ちをくらった気がした。新聞記者がコメントを求めて電話をかけてきたのだが、わたしは混乱し、コメントが出せなかった。あつてはならないことだし、にわかには信じられなかった。



立松とわたしは、同時代を生きていた。年齢の近い書き手は他にもいるが、同時代を生きていると感じさせる書き手は、立松だけかもしれない。流行作家と違って、純文学の作家が書き続けるためには、版元の支援が必要で、苦勞も多い。がんばっている立松を見ながら自分もがんばってきた。これからは一人で書き続けるしかないと思うと、とてつもなく寂しい。

○

悼 立松和平さん

道浦母都子 歌人

きさらぎの光の雨はやわやわと逝きたる君を包むごとく降る

君は逝き時間とまりしひとところ音なく光る椿の赤が

生き残るわれら詮なし同時代分かち今なき立松和平

春彼岸 土の香のする声聞こゆ空のどこかで遠雷が鳴り

君去りしのちの小暗き夕暮れを花の時間が流れてゆきぬ

一緒のスタート台から

宮辺尚 新潮社嘱託

一九七〇年、大学を卒業して新潮社に入社し、文芸雑誌「新潮」の編集部配属された私は、その夏、立松さんに出会った。当時彼は処女作「途方にくれて」を「早稲田文学」に発表し、集英社に内定していた就職を取り消して大学を留年、肉体労働のアルバイトに従事しながら作家になろうと励んでいる時期だった。こちらは編集者のスタート台、彼は作家のスタート台、年齢がほぼ同じということもあって、急速に親しくなった。

当時の「新潮新人賞」は以前の「同人雑誌賞」のやり方を引き継いで、同人雑誌掲載の形で応募してきた作品の中から編集部が十篇程度を選んで候補作として掲載、その中から選考委員が受賞作を決定するという仕組みだった。私は彼の作品をこの候補作にしたいと考えて彼と話し合い、彼は同人雑誌「むむむ」掲載の「今も時だ」による応募という形でそれに応えてくれた。弾むような文体、鮮烈なイメージ、私は今でもこの作品に一番の思い入れがある。見事候補作となって七一年の三月号に掲載された「今も時だ」は、彼の商業文芸雑誌初登場作品となった。掲載誌を届けた時、目次の自分の名前にじっと見入ったあと、掲載ページを開いて確認する彼の嬉しさに満ちた表情が忘れられない。

あれから四十年、人事異動を繰り返した私は彼の担当編集者であり続けることはできなかった。しかし、七三年六月、彼が宇都宮市役所に勤務していた時代には、家内と共に彼の家を訪ねて泊めてもらい、美千繪夫人ともどもの歓待を受けて大谷や益子を案内してもらった。北海道旅行の途次に知床



の彼の別荘を使わせてもらったこともある。足尾にも、日光にも一緒に行ったし、塩原温泉から檜枝岐村をドライブして回ったこともある。彼はいつになっても、かつて一緒にスタートした仲間として私を遇してくれた。

ありがとう、わっぺいさん。でも、逝くのが早すぎるよ。

○

一九九三年、インド

村瀬和正

佼正出版社編集者

著作の一部が盗用との指摘を受けた年の末、私は、身が疎むほどのバッシングを浴びる立松さんとインドへ向かいました。釈尊最後の旅の跡を追う連載の取材でした。

あのできごと以来、立松さんに対する世間の評価はさまざまですが、ただ、どのように評されようと、あらゆる責めを一身に負い、憔悴しながらもお旅のあいだ内省を深め続ける作家の姿を、私はいつか正しく伝えなければと思ってきました。不利な誤解も受け容れ、過ちは過ちとして認め、暗闇を手探りで歩む危うさと静謐さをもって、さながら悲壮感漂う巡礼者のごとく真摯に再生へ向かう道筋を求める作家がそこにいました。

人には、それぞれ正義があります。しかし、立松さんはその後も、他が押し立てる正義に正義をもって抗するのではなく、ひたすら己の至らなさを見つめる忍辱に徹したのです。「逃げず、語らず、この連載を支えに頑張る」という立松さんの言葉が、当時の取材メモにあります。釈尊は「怒りに対し



て怒り返さず、むしろ自分の心を制御する。そこに私の精進がある」と言っていますが、立松さんの秘めたる意志がこの言葉と重なります。そして、インドにおいて立松さんは「人はみな火宅に棲み、生ある限り罪惡深重の身であるがゆえ精進を続けるのだ」との気づきを得たと私は思っています。それはやがて、小説家は書くことよつてのみ身を雪ぐ精進となるという信念に昇華されました。つまり、執筆を通して立松さんは日々潔斎に努め、作品はその精進を証すものであったと思うのです。

ところで立松さん、連載中の小説「羅什」は、遺志の継承者の力を借り、必ず成就させます。でも、あの丸い書き文字はもう見られないのですね。寂しいです。そういえば、インドの宿の精算伝票が出てきました。青インクのボールペンで書かれた「横松和夫」の署名入りです。その文字を見ていると、立松さん、あなたの声が聞こえてくるようです。

○

面識のない者からの追想

山口泉 作家

訃報は逝去の翌日、立ち上げたコンピュータ画面上のインターネット・ニュースで知った。ちょうど前日、安曇野に、以前、河出書房新社におられた長田洋一さんを訪ねたばかりである。立松氏の小説家としての出発にあたっても巨きな役割を果たしたこの編輯者から、かつて私は都合三冊ほど、氏の文庫本（長篇小説二冊、エッセイ集一冊）に「解説」を寄稿する機会を得ていた。私が反射的に思ったのは、会ってきてまもない長田さんが、突然の訃報にどう接せられたかである。



立松和平氏と私とは、ついに直接の面識はなかった。ただ、たとえば九〇年代の初め、石垣島・白保の珊瑚礁を訪ねた折り、環境保護運動の拠点となっている民宿の周辺で、私の赴くほんのしばらく前、氏がその浜辺を歩いていたという話を聞いたこともあったし、またこれは訃報に接してから後のことであるが、私とその経営に関係している目黒区内の自然食品店に、何度か、御家族で買い物に立ち寄らされていたらしいことも判った。そうした意味で、あるゆるやかな拡がりのなか、同じ時代に氏が生き、活動していることに注意を喚起される、という経験は、少なからずあった気がする。

膨大なその著作のなかで、私が接したのはもとよりそのほんの一端に過ぎない。だが、その管見を通じて「散文の書ける人」「描写のできる人」「小説巧者」という氏の印象は確固たるものとして、私のなかにある。「現代日本文学」という制度の、ある根源的な貧しさのなかで、氏の存在と営為とは一つの希望だったと言えるのではないか。

「戦後世代」という言葉が、とりあえず戦後生まれの人間を指し示すのだとすれば、そのなかで小説家として随一の伎倆を具えた書き手は、同時に制度としての「文学」をたえず越境しようとする志向を携えてもいた。

○

立松和平さんに感謝

山田俊男 参議院議員

和平さんとは、私がJA全中の米穀課長の時に、食と農の国民的合意を得るために、これまでの米

●

価要求大会に代わるものとして消費者団体等と一緒に開催した昭和六二年の「いのちの祭り」食と農を考えるシンポジウム」のコーディネーターをやってもらってからです。それから二十数年の濃厚な付き合いになりました。

私が参議院選挙に出る時に書いた「農と日本の再生計画」の「あとがき」は和平さんに書いてもらった。全国を回った時、「この本の一番いいのは立松和平さんの『あとがき』だ」と言って、この「あとがき」だけを読み上げて私を紹介するというのが一度とならずあった。

訃報を聞いて、改めて読んでみた。

「日本の食と農を、いったい誰が守るのか。このことを考えると、暗澹たる気分になってくる。農業とは日々の糧をつくる人の営みで、生きる基本の産業である。それなのにこの国では、長いこと農がおろそかに扱われてきた。農業を取りまく困難な問題は、後から後から激しく押し寄せてきてきりがない。それらすべてと闘ってきたのが、山田さんなのである。朝早く家を出て、人が動いている間は秒刻みの活動をし、人が寝静まった深夜に帰宅する。それからまた早朝に出勤する。車中では資料にあたり、携帯電話で会議までする。こんな暮らしができるのは、日本の農業を守ろうという使命感が並はずれて強固だからである。激動のくらしをしているのに、いつも静かに微笑んでいる。この日にやらねばならないことを整然とこなしながらも、遠くを見据えていることを忘れない。そんな山田さんに、日本の食と農を託したいと、私は願っている。」

本当にありがたい。

そして、この「あとがき」は、私を激励しながら、「自分はどう生きるか」と、和平さん自身の決意



を書いたのだと確信した。そういう和平さんの決意を私の決意にしたい。

○

味噌汁の記憶

山田裕樹

集英社文芸部

宇都宮と東京の距離を知っていますか？ 私は知っています。百キロとちよつとであります。なぜ知っているかというと、百キロを越えて打ち合わせに行く出張になるからであり、三二年前、私が二四歳の時、入社初の出張が宇都宮の立松和平さんだったからです。

市役所の業務を終えて、横松から立松に変身し、さあ飲みに行くさあ、といつてにわかに始まるバーの彷徨。まだ宇都宮は餃子の町でなかったような気がしますが、わけわからぬまで飲んで、打合わせのような話をし、そのまま横松宅で爆睡したのであります。

朝の八時ごろそろりと蒲団からまろびだして宿酔いでもだえていると、横松に戻った立松さんが元氣一杯で市役所に出勤し、シンペイ君、モモコさんがそれぞれ学校に行き、やつと起きた私の如き若造に立松夫人は、豪華朝食を用意してくださったのです。

野蒜、おいしゅうございました。納豆、おいしゅうございました。シシャモ、おいしゅうございました。豆腐とあぶらげの味噌汁三杯と白米二杯を食べてしまった私に対し、食欲があるのはいいことだと言ってくださった立松夫人。

そんな遠い過去の思い出が、栃木の味噌の香りとともに、昨日のことのように思い出されます。そ

れから、立松さんとは、傑作「歓喜の市」「天地の夢」など十冊の本を造らせていただきました。

その頃のもろもろの思い出は、私の心の中に生きています。

永遠なれ、立松和平さん。

三途の川にシシャモがあがってくるシーンを訥訥とマイクにむかつて話す立松さんの声が、たった今、聞こえたような気がしました。

○

なんとなく幸せが一番の幸せ

山本樹

家の光編集部

「取材先は、ふつうの農家でいいですよ」

小誌『家の光』連載「立松和平の元氣探訪」の取材打合せ中、よく立松さんがおっしゃっていた言葉です。立松さんが、全国の農村を訪ね歩き、農家にエールを送るこの連載。平成一六年一二月号から始まり、五年間で計六十回、立松さんからの要望もあり、四七都道府県すべてを探訪しました。

じつは、連載開始当初は、立松さんにできるだけ興味をもっていただける対象をと思い、グリーン・ツーリズムで有名な地域、「葉っぱビジネス」で成功した山間地域など、いわゆる「先進事例」を訪問先に選んでいました。

しかし、原稿を何回かいただくうち、気づかされます。どんな立派な取り組み事例を取材しても、立松さんが描くのは、地に足をつけて生きている人、家族の物語、家族のささやかな幸せだったのです。



もつとも印象に残っているのが、宮城県のツルムラサキの産地を取材したときでした。地元の農協に紹介してもらい、訪れたのは、五十代の夫婦と七十代のおばあちゃん三人で営む農家。栽培や出荷方法もごくごくふつうで、後継者もない家でした。どこからどう見ても、どこにでもあるような農家だったので、今度ばかりは「なにを書けばいいの？」と、お叱りを受けるのではないかと、内心冷や冷やしながらの取材でした。

ところが、立松さんのまなざしは違いました。菜園の手入れが行き届いている自給的な暮らしに感心し、百歳のひいおばあちゃんがいて、遠くに住む息子が結婚した話を織り交ぜながら、つつましくも安らぎに満ちた家族の姿を描いてくれました。

「なんとなく幸せが一番の幸せなのだ」

この回の結びとして書かれた言葉です。立松さんのやさしい人柄がにじみ出た言葉で、「あたりまえの暮らしのよさ」という、小誌編集部がたいせつにしてきた価値観を、改めて思い知らされる出会いです。

○

立松さん、
まずいよ

吉岡忍
作家

立松さん、まずいよ、いきなりそっちへ行っちゃうのは。この秋は国際ペン東京大会でパレスチナの写真展をいっしょに開こうよと言い出したのは、あなただよ。いなくなっちゃって、こっちはどう

すればいいのよ。

私はたいい立松さんのあとをついていけば大丈夫だと思っていた。

テレビ朝日の「ニュースステーション」だって、あなたが辺境の地を訪ねて、あの口調でやっているから、じゃあ私は人のいるところに行つて、人間というやつは一生懸命、かつむなく生きているんだとレポートすればいいんだと考えてやつてきた。

立松さんは日本ペンクラブの平和委員会委員長だから、毎年三月三日の平和の日には作家を引き連れ、あちこち出かけては、対談形式の講演会をやつてきた。ときどき私もお供して、去年のいまごろは神戸でいっしょに壇上に上がり、震災の話をしていた。

その一年前のいまごろは、やっぱり日本ペンクラブがやつた「災害と文化」の世界フォーラムで、立松さんは名作「浅間」の一節を朗読した。暗いステージのスクリーンには、娘さんの桃子さんが描いた絵が次々に映し出されて、壇上でスポットを浴びたあなたはまぶしそうに、にこにこ見上げていた。あれだつて、立松さんがこうやりたい、と言つたから、エラそうに総合演出を名乗つていた私はあとをついていっただけだった。

去年秋、立松さんから電話をもらつて、新しい小説誌を出すから、そこに小説を書かないか、と誘われた。うん、書くよ、と答えてしばらく考え、今年になつて書き始めたたん、あなたは行つてしまった。

立松さん、まずいよ。ほんとにまずいよ、これは。

立松和平・略年譜

1947 2月15日 栃木県宇都宮市に生まれる。本名・横松和夫

1954 4月 宇都宮市立西原小学校に入学

1960 4月 宇都宮市立一条中学校に入学

1963 4月 県立宇都宮高校に入学。写真部と弓道部に所属する。

1966 4月 早稲田大学政経学部に入學。当時キャンパスは学生運動で騒然としており、機動隊に守られての受験であった。入学後「早稲田キャンパス新聞会」に入会するが、学生間の政治的対立が新聞会にも持ち込まれ、除名される。その後、文章表現研究会に入会する。

1967 この頃から日本各地をバックパッカーとして歩き回る。復帰前の沖縄にも行く。

1968 この頃から本格的に小説を書き始める。残存する最初の作品は『溜息まじりの死者』。

1969 この年、初めてアジアを旅行する。韓国からその後、台湾から沖縄へと足を伸ばし、その時の体験を基に文壇的な意味での処女作『途方にくれて』を書く。同人誌「むむむ」（創刊号6月）

に『人形の骨』などを発表する。この年、集英社の就職試験に合格する。

1970

2月 『途方にくれて』が「早稲田文学」に掲載される。これを機会に作家になる決意をする。集英社の内定を取り消してもらい、大学も留年し、山谷や築地でアルバイトをしながら小説書きに励む。10月 『自転車』で第1回早稲田文学新人賞を受賞する。

1971

3月 早稲田大学を卒業。「新潮」3月号に『今も時だ』を発表。商業文芸誌に載った初めての作品で、新潮新人賞候補となる。3月25日 小山内美千繪と結婚、杉並区成田東に新居を構えるが生活は苦しく、土木作業員や病院の臨時職員などの職を転々としながら、小説を書き続ける。妊娠した妻を渋谷区恵比寿の実家に残し、インドに旅立つ。11月11日 長男心平が誕生、インドから帰国。

1973

4月 宇都宮市役所に就職し、生活の立て直しを図りつつ執筆活動は続ける。以後、78年12月まで勤務する。

1977

12月30日 長女桃子誕生。

1978

5月 集英社より短編集『途方にくれて』を刊行。8月 国文社より『今も時だ』を刊行。同月、冬

樹社より長編小説『フリキの北回歸線』を刊行。

- 1979 『閉じる家』(「文学界」5月号)、『村雨』(「文芸」9月号、後に『遠雷』と合併)が立て続けに芥川賞候補となる。

- 1980 『遠雷』で野間文芸新人賞を受賞。

- 1981 根岸吉太郎監督による映画『遠雷』が公開される。

- 1986 アジア・アフリカ作家会議の「若い作家のためのロータス賞」を受賞。この年の1月からテレビ朝日の「ニュースステーション」こころと感動の旅」にレポーターとして出演。以後、テレビや雑誌の取材などで国内外の各地に旅行をする。

- 1991 3月『立松和平自選短編集』を刊行する。

- 1993 『卯洗』で坪田譲治文学賞を受賞する。

10月 雑誌連載中の「光の雨」が連合赤軍事件で死刑が確定している坂口弘から自著『あさま山荘 1972』からの「盗作・盗用」ではないかと抗議を受ける。「安易な形で引用した」と謝罪し、連載を中止する。『光の雨』は、全面的に改稿し新潮社より刊行(1998年7月)。2001年には早稲田大の後輩高橋伴明監督により映画化される。

- 1994 長年通い詰めた知床(斜里町)に毘沙門堂を建立する。後に、太子堂、観音堂も建立。毎年6

月の第4日曜日に、地元の人々と共に記念式典を行う。

- 1997 『毒―風聞・田中正造』で毎日出版文化賞を受賞する。

- 1999 『春雷』『性的黙示録』『地霊』を収めた「『遠雷』四部作」を刊行。

- 2002 歌舞伎座上演の「道元の月」の台本を書き、大谷竹次郎賞を受賞する。

- 2006 3月『立松和平 日本を歩く』(全7巻)を一挙刊行。

- 2007 『道元禅師』(上下)で泉鏡花賞を受賞する。

- 2008 同じく『道元禅師』で親鸞賞を受賞する。

- 2009 12月『立松和平全小説』(全30巻 勉強出版)の刊行が始まる(現在第3巻まで刊行)。

- 2010 2月8日 多臓器不全で死去。満62歳。

(この間、小説のみならず、エッセイ集、紀行(写真)文集、ルポルタージュ、童話・絵本、など300冊を超える書籍を刊行する。また、『遠雷』をはじめとする諸作が英語訳、中国語訳、ベトナム語訳される)

(黒古一夫作成)

父の愚直さ

林心平

このたびは父、立松和平を偲ぶ会を開いていただき、また追悼文集まで編んでいただき、心よりお礼申し上げます。

父が亡くなってから現在に至るまで、母も私も妹も、父の不在を感じる事ができません。旅に出ていることが多く、家にいるときでさえたいいは書斎にこもっていたのです。いつでもドアを開けて、ひよいと出てくるような気がしてなりません。そんなとき、一七年前に父の書いた、ひとつのエッセーを思い出しました。「父の愚直さ」という題名で、父の父が亡くなったときに、父が書いたものです。自分の父が戦中戦後の艱難辛苦に耐えながら「どんな時でも愚直に生きてきた」と述べ、「私の原点ともいうべき父が死んだのは、私には痛切なことなのである。私も愚直に生きねばならないと思うのだ。」と結んでいます。

そして今、この文章を読み返すと、父もまた愚直に生きたのだと思わずにはられません。原稿用紙に文字をペンで刻みつけ、休むことなく小説を書いてきました。自分の選んだ道を愚直に歩き続けた父は、幸福であったと思います。父はこうも書いています。

「別離というのは悲しいものである。別離を幾つも重ねているうちに、いつしか私は父が立ってい

た場所に立たなければならぬのである。それが生きていくということなのかもしれない。」

私はこの言葉に強く支えられています。突然の死であつたため、父と会話を交わすことはできませんでした。でも、父が書き残してくれたことに助けられたと思いました。私もまた、父が立っていた場所に立ち、生きていきなさいと言われた気がしたのです。

ありがとう。お父さん。

あとがき

二〇一〇年二月八日、東京に梅の香が漂う夕刻、作家・立松和平（本名・横松和夫 享年六二歳）は逝去した。死因は多臓器不全。突然の死報に、彼を知る多くの友人・知人たちは言葉を失った。

早すぎる逝去である。御遺族のたつての希望で葬式は近親者のみの密葬ということになり、二月一〇日、入谷・法昌寺で通夜。翌二一日、学生時代から親交のあった福島泰樹入谷・法昌寺住職によって本葬が執り行われた。

こうした経緯から、友人たち有志の中から偲ぶ会を開催できないだろうかという声が高まり、喪主・横松美千繪さんの御理解をいただき、作家・立松和平を基本にという条件のもとで「立松和平さんを偲ぶ会」を開催する運びとなった。

立松和平は旅する行動派の作家と言われるように、北海道から沖縄まで、さらには海外まで、漂泊する作家のように、リュックに資料と原稿用紙を詰め込んで旅して歩いた。詳しい記録は「立松和平日本を歩く」全七巻に詳しくまとめられている。こうしたことから全国各地に、出会い、語り合い、友情を深めた多くの友人・知人たちがいる。私は二月中旬和歌山県古座川町を訪れたが、公民館には二五年前の立松和平の色紙が飾ってあった。聞けば、二五年前にお訪ねいただいたということで、地元の方々は彼の死を悼み、懐かしがって居られた。二月下旬、沖縄を訪ねた友人も沖縄にもそうした方がいたという。枚挙に暇がないほどである。どこに行っても、すぐあの笑顔で仲間になってしまう。

そして離れていても懐かしがらせてしまう。どこにでもいる隣りの村の若者であり、伯父さんであった人である。

こうした人たちにも是非、立松和平に最後のお別れをしていただきたい、声をかけていただきたいと考え、今回、実行委員会の責任において偲ぶ会を企画させていただいた次第です。

この追想集は、これまで立松和平さんと親交のあったと思われる知人・友人の方々に一言何か送る言葉を、とお願ひした結晶です。時間的問題や本人の死亡などにより、本来ぜひ書いていただきたいかった多数の方の文章が収録できませんでしたが、時々この追想集を手に取り、それぞれの心の中に生き続けるであろう立松和平を想い出し、語りかけていただければと思います。最後になりましたが、忙しい中、文章をお寄せいただいた各位に御礼申し上げます。ありがとうございました。

合掌

二〇一〇年三月二七日

立松和平さんを偲ぶ会実行委員会一同（文責 高橋公）

立松和平さんを偲ぶ会

実行委員長

北方謙三（作家）

実行委員

加藤宗哉（三田文学編集長）

黒古一夫（文芸評論家）

佐野 博（知床知布泊村長）

清水光雄（元毎日新聞社会部長）

鈴木基司（みどりクリニック院長）

高橋 公（NPOふるさと回帰支援センター常務理事）

沼尾博行（ワッカの会）

福島泰樹（歌人）

藤田和芳（大地を守る会会長）

流れる水は先を争わず 立松和平追想集

平成22年3月27日

発行人 北方謙三

発行所 立松和平さんを偲ぶ会実行委員会

連絡先 〒104-0061

東京都中央区銀座4-14-11

七十七ビル3階

NPOふるさと回帰支援センター内

高橋公

TEL..03-3543-0336

制作 (株)ウェイツ

※非売品